

九州大学医学部熱帯医学研究会
沖繩学術診療調査団報告書

1967年7月～8月

九州大学医学部熱帯医学研究会

伊原間中学校仮診療所



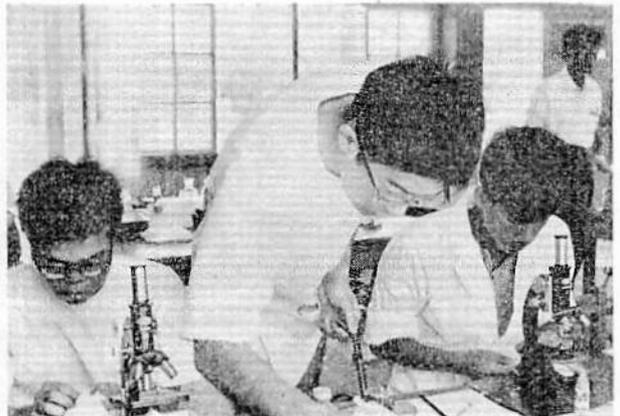
診療を受けに来られた人々



予診室 & 薬局

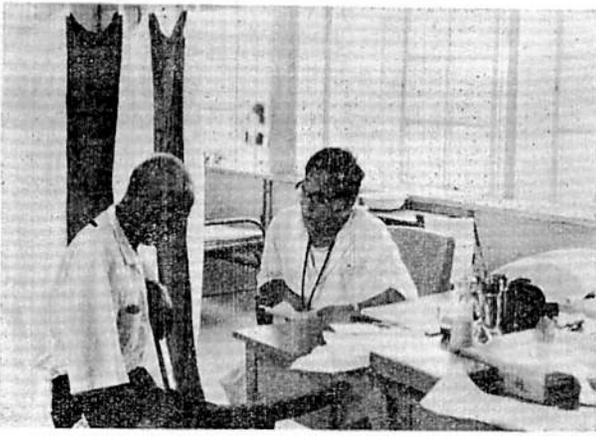


検査室風景



顕微鏡から目を離す暇もない検査室

診察風景



説明中の小林先生



子供達でいっぱいの子小児科
植田先生・吉村研修生



手術中の矢幡先生(皮膚科)



診察中の白日研修生
上木先生(むこう側後姿)



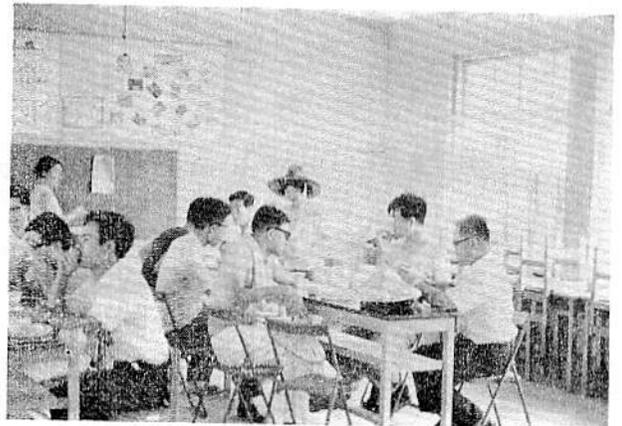
応援の琉球政府結核検診車



現地公看大城さん(左)達の協力も得て



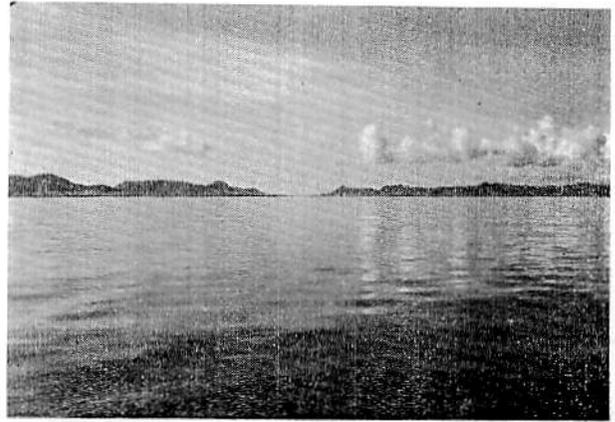
1日の診療を終えて
(中央小林団長)



昼食は教室で



診療団本隊博多を発つ（於博多駅）



船上より遠く石垣島を望む
中央の低地が伊原間



診療団員22名（於伊原間中学校仮診療所）

目 次

	頁
まえがき	1
診療調査団	2
1. 派遣計画・趣旨	
2. 団員構成・目的	
3. 行動記録	
4. 診療日誌	
診療報告	11
1. 内科	15
2. 小児科	20
3. 皮膚科	22
研究報告	
1. 石垣島住民の日本脳炎ウイルス に対する抗体保有調査	24
2. レプトスピラおよびリケッチア に関する研究	25
3. 伊原間部落の健康・栄養調査	26
診療団に参加して（感想文特集）	32
伊原間便り	42
会計報告	44
あとがき	46

ま え が き

会 長 宮 崎 一 郎

去る7月、我が熱帯医学研究会としては最初の診療団を沖縄へ派遣しました。沖縄は昨年夏期八重山群島調査団に次いで2度目ではありますが、このたびは診療を、という事で何かと不慣れな点もあり、団員の諸君も実現迄いろいろ苦勞したようです。そのかいあつて、小林団長の指導のもとに、現地石垣島での診療を無事終え、全員元気に帰つてきました。

このたびの診療の中心地となつた石垣島伊原間一帯（裏石垣）は戦後宮古島や沖縄本島などから入殖してできた開拓部落であります。パインアップルを主産業とする農業地帯で、折悪しく農繁期であつたにもかかわらず、数多くの受診者を迎え、診療団としても少なからず現地の人々のお役に立てた事はまことに喜ばしい事であります。猛暑の折、種々の困難にも屈せず、診療や研究に励まれた診療団員各位に心からの敬意を表するとともに、診療団派遣に際し一方ならぬ御協力と御援助を賜りました学内、外の関係各位に厚くお礼申し上げます。

（ 寄生虫学教授 ）

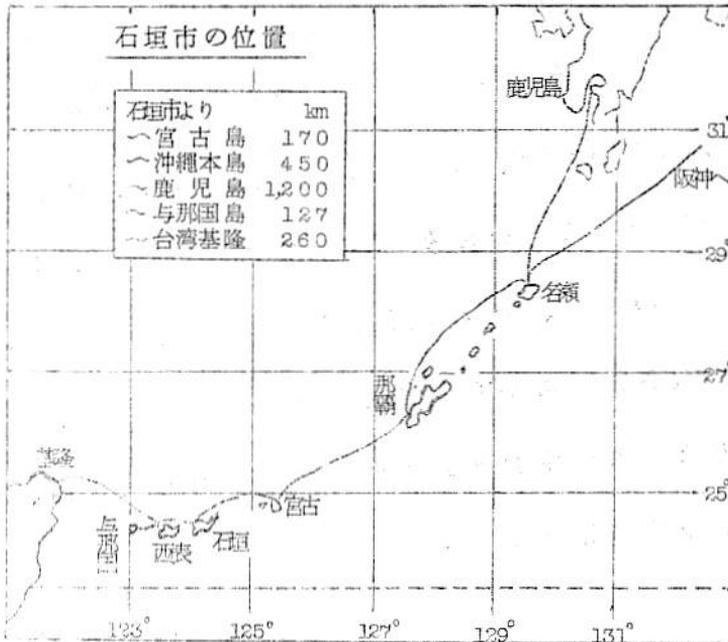
診 療 調 査 団

1. 派遣計画・趣旨

九州大学医学部熱帯医学研究会は1964年熱帯医学の研究、海外への調査団派遣、各国との学術交流等により医学の発展に寄与し人類に貢献する事を目的として結成されました。1965年7月には第1回学術調査団を奄美大島に送り寄生虫、赤痢、慢性疾患等について多大の成果を収めてまいりました。更に1966年7月には第二段階として我々の可能な範囲で最も熱帯に近い場所として、沖縄八重山群島を選び、一昨年の成果を基として調査団を派遣した結果、ハンセン氏病、結核、広東住血線虫等の研究調査を行なうと同時に現地の医療事情をいろいろ見聞きた結果、沖縄の学問的興味もさることながら、医療の必要性を痛感して帰りました。そこで1967年度には九州大学医学部同窓会の後援を得て従来の研究調査を更に発展させていくと共に新たに診療も行ないたいと思っております。そしてこれが沖縄八重山群島の医学ならびに医療衛生の発展改善に何らかの形で寄与する事が出来ることを希望しております。

2. 診療団員構成・目的

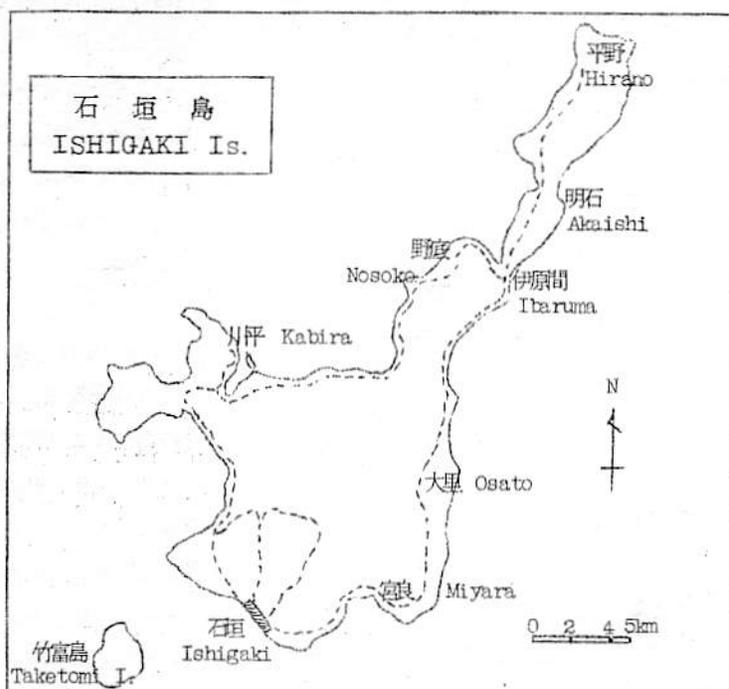
団長 小林 謙(九州大学第一内科講師) 実地修練生 吉村 健清
 医師 植田 浩司(小児科講師) 白日 高歩
 矢幡 敬(皮膚科講師) 学生 渡辺喜一郎(6年 学生団長),
 上木 良輔(第一内科大学院) 西岡 三馨(6年 渉外), 鄭九龍(6年 写真), 川野



信之(5年 渉外), 福重淳一郎(5年 記録), 野田 芳隆(5年 会計), 木戸 靖彦(5年 装備), 石原 昌清(5年 装備), 関 宗雄(4年), 瀬々 頌(4年), 玉田 隆一郎(4年 写真), 角田 克子(4年)
 公衆衛生看護学生
 吉田美枝子, 野口和枝,
 平野俊子, 清水由美子

目的

1. 診療部門
 - (1) 内科一般診療
及び一般検査
 - (2) 小児科一般診療
 - (3) 皮膚科一般診療
2. 研究部門
 - (1) リケッチア及び
レプトスピラに
関する調査
 - (2) 寄生虫及び寄生
虫病
 - (3) 衛生動物に関す
る調査



3. 衛生知識の普及
並びに医療施設の見学
講演会、映画、スライド

目的地

沖縄八重山群島石垣島(石垣市)
伊原間部落周辺

3. 診療団行動記録

- 7月 8日(土) 壮行会(於 医学部恵愛団
ホール)
- 11日(火) 先発隊 鹿児島発
- 12日(水) 那覇着
- 13日(木) 挨拶廻り、交渉
- 14日(金) 那覇発
- 15日(土) 石垣着 挨拶廻り
- 16日(日)
- 17日(月) 設営準備
- 18日(火) "

- 19日(水) 宿舍設営
本隊「第一かいもん」にて
鹿児島発
- 20日(木) 先発隊 最終打ち合せ
本隊 那覇着 直ちに石垣
へ向う
- 21日(金) 本隊 石垣着 先発隊と合
流
- 22日(土) 診療所設営 説明会
- 23日(日) 診療開始 午後乳児クリニ
ック 映画会
- 24日(月) 診療
- 25日(火) " 映画会
- 26日(水) 診療
- 27日(木) "
- 28日(金) " 小児科一乳児集団健
診(於 八重山保健所)
- 29日(土) 診療 夕食会

30日(日) 診療 午後伊原間中学学童
集団健診 映画会 夕食会

31日(月) 石垣島見学
講演会(於 石垣市文教会
館)

8月 1日(火) 石垣発
2日(水) 那覇着 挨拶廻り
3日(木) 午前中 本島見学
午後 那覇発

4日(金) 鹿児島着 直ちに博多へ
博多着 午後11時20分

4. 診療日誌

7月11日(火) 先発隊鹿児島出航

「おとひめ丸」出航予定時正午を過ぎても来るはずのM₄ 渡辺、西間両隊員が港に現われない。先に上船した我々4人やきもきする事一時間余り。正午を15分過ぎて両氏タクシーでかけつけた。既にタラップの上げてある船に出国手続もほどほどにかろうじて上船、例によつて船が遅れたからいようなものの方が一定刻に出航していたら「船はでてゆくテープは残る……」になりかねない。何でも列車が事故で遅れたとか。ともかく研修生吉村、M₄ 渡辺、西間 M₃ 石原、木戸、福重の先発隊6人無事船上の人となつた。

7月12日(水) 先発隊那覇着

西間、石原両氏の船酔いも大した事なく全員無事那覇港におりたつ。沖縄の夏は相変らずだ。早速宿舎の海員会館ホテルへ。直ちに仕事を始める。先ず全員で琉球新報へ挨拶にゆき、親泊総務部長に多くの有益な御忠告をいただく。その足で厚生局へ出向き、業務課、医務課等で医師免許や薬品の持込み、ハ

ブ血清の借出についての交渉、手続。

とつくと石垣に着いているものとばかり思っていた別送の荷物がちやんと那覇港の税関においてあるのに驚きあわてて琉球海運へ行く。安里総務部長、知念課長の計らいでやつとカタがつく。我々の乗る那覇丸で運んでくれるとの事。

7月13日(木) 挨拶廻り、交渉

8時30分起床、その前に熱研先輩で沖縄出身の西平氏より電話がある。現在中部病院でインターン中、非常に多忙で逢う暇もないとの事、頑張つておられるらしい。

那覇で開業しておられる先輩の喜屋武、宮城両先生を訪門する。喜屋武先生は前日遅くまでお仕事とかで逢えず。宮城先生はお忙しい中時間をさいて下さり那覇在住の九大先輩の開業医の先生方から診療団への援助を引受けるの旨伺がい一同感謝する。

再び琉球海運へでかけ別送品の税関手続を終え託送に切换え、手荷物も同時に発送する事に決定。船便の確認の為泊港に行つた所、予定の船が一日遅れるとの事で本隊のスケジュールを組み直しその旨福岡へ琉球新報を通じて連絡する。文字通りの東奔西走で、安いはずの車代も塵もつもれば何とやらだ。夜は西平氏の御両親を訪ね、お話をうかがつたり御馳走になつたり。

7月14日(金) 先発隊那覇発

宮城先生、琉球新報、琉球海運等との最終打ち合せを済ませ連絡要員に石原(M₃)を残し先発隊5名は泊港発午後3時の「那覇丸」に上船。

出航前に折良く那覇滞在中の石垣市長に会

ろ。

船はかなり揺れる。船室でウトウトしていた渡辺(M4)と福重(M3)窓から何らのコトワリなくはいつてきた海水にビショヌレ、誰に怒り様もない。

7月15日(土) 先発隊石垣着、挨拶廻り

午前11時30分 石垣着

市助役若山氏やここの開業医で九大先輩の宮良先生の奥様の出迎えをうけて石垣島におりたつ、南の島はいつものたたずまいながらあちこちに近代化の息吹を感じさせる。

早速市役所でスケジュールの打ち合せをし午前中に八重山病院、八重山保健所などへの挨拶廻りを終える。当分の間の宿舎を石垣ユースホテルに決め、午後2時15分船荷おろしに立会い荷物の確認、目下の所異常なし。

八重山毎日新聞社へ出かけ琉球新報への連絡を依頼する。仕事を終え久しぶりに畳の上で休憩。

夜9時宮良長和先生宅を訪門、皆ゆつくりくつろぎ例によつて厚かましく何でも頂いた。

7月16日(日)

日曜の為仕事は出来ず我々も休憩日とする事に決定、自由行動とする。渡辺(M4)福重(M3)は竹富島へ、吉村(研修生)、西間(M4)、木戸(M3)は近くの海岸へ泳ぎにでかける。

夜ミーティング、今後の我々の仕事について検討する。

(附)本日渡辺(M4)隊員の誕生日である。

7月17日(月) 設営準備

午前8時半、市の清掃車で薬品、器具類を

診療地である伊原間に移す。伊原間で久しぶりに駐在公舎の大城さんに会う。相変わらず元気で大張りきりだ。診療所、宿泊所の設営の為八重山病院伊原間出張所、伊原間公民館、伊原間中学校等を見学検討の結果、伊原間中を診療所として使用する事に決定、宿舎は3ヶ所位に分宿する事になりそうだ。

7月18日(火) 設営準備

伊原間の部落会長松竹巖氏を訪門。今後の協力を依頼する。彼独特の人なつつこい笑顔で「よろしく頼みます」との事。

渡辺(M4)福重(M3)は平久保半島の先端平野部落迄挨拶に出向く。

診療日程で皆頭を痛めているが、結局大城さんの管轄区域に野底地区を加え、部落単位で期日を指定する事に決定。早速市役所を通じて各部落に連絡する事にする。

食事の件に関して伊原間中の給食施設を使用させてもらうべく石垣信政校長に面会する。我々先発隊の伊原間での昼食は相変わらず15セントのそば一杯である。他に食物がないのだから致し方ない。

7月19日(水) 伊原間にて

八重山病院伊原間医官宿舎を診療団の宿舎として使わせてもらう事になったが、なにしろ今迄誰も住んでいなかったせいかネズミ族の仕業とみえる大穴が畳のあちこちにあり少々の穴はがまんするとしても使える畳は数少ない。結局暑い中、伊原間中より畳5枚借りてくる事となり木戸(M3)はリヤカーで畳運び。

残った我々トイレやバスをはじめ押入れその他の大掃除。先発隊が「雑巾がけ」の真最

中とは今頃「第一かいもん」に乗っているはずの本隊の面々想像もしていない事だろう。医薬品も一応宿舎に運び今日はこれでおしまい。「少し位風が吹かないかなあ」とは本隊のへバツ冬顔を見たい先発隊いじわる諸氏の弁。

7月19日(水) 本隊博多発

小林団長はじめ本隊の16名NHK、RKBの取材班や西日本新聞社民生事業団、琉球新報福岡支局の方々の見送りをうけ、午前8時40分「第一かいもん」にて博多を出発。昨年からの準備をはじめようやく出発にまでこぎつけたがこれからが本番だ。やや皆緊張気味。

午後2時過ぎ、鹿児島到着 全員荷物を手分けして税関へ運ぶ。検査は3時からだ。4時半には全員が出国手続を終了。パスポートの遅れていた清水嬢(公看学生)もやつと鹿児島で手にはいり一安心。

6時30分「おとひめ丸」鹿児島出航。海はひどく静かだ。船にはじめての人もこれなら安心だ。

7月20日(木) 先発隊 最終打ち合せ

八重山保健所、同病院より借用の器具類を受取りにゆく。その足で伊原間へゆき診療日程に関する最終打ち合せを終える。

食事の件については伊原間中の給食室を使わせていただき、給食婦の2人のおばさんも手伝って下さるとの事。我々もこれで一安心、なにしろ食物の事で後からくる本隊の連中にうらまれては恐いから。期間中の衛生教育その他の映画の為の映写機の件については明日石垣中へ受取りにゆく事になる。やつと大

体の見通しがついた感じだ。明日は伊原間中に診療所設営の予定。これが又大仕事だろう。

7月20日(木) 本隊那覇着 直ちに石垣へ向う。

昨夜来海は荒れる事なく全員船酔せず、船中で偶然一緒になった久留米大学夏期診療団の人々といろいろ語り又教えてもらう。

午後2時那覇入港。ここで又例の手続に時間がかかり上陸したのは3時40分。一安心と思いきやこれからが大騒ぎ、というのは明日出航予定の「那覇丸」が本日午後5時出航に変更との知らせ、全員慌てて荷物を泊港へ運んだが一時は車がいつこうつかまらずいら

ら。那覇での打合せ、その他の交渉も短時間に大急ぎですませ陸上2時間にして5時半には又全員船上へ。琉球海運の御好意で我々の為にサロンを開放してもらい、出航したのは午後6時10分、これで博多をでて3日目にはもう石垣という訳だ。何という慌ただしさ、海が荒れないのが幸いだ。

7月21日(金) 先発隊、本隊と合流

朝、新聞をみて驚いた。明日到着するはずの「那覇丸」が「本日9時30分入港予定」となっている。すぐに琉球海運へ出かけ本社への照会を依頼、返事を待つまでもなく市役所に「本隊まもなく石垣着」との連絡がはい

る。あわてて港へ出向くと既にもう船は岸壁に着いて皆のこにこ顔がみえる。期待に反して誰もまいついてないらしい。早速皆を休憩場所の旅館へ。

今日診療所を設営する予定の先発隊渡辺

(M4) 福重 (M3) は再び伊原間へゆき本隊到着の旨知らせると共に現地の人と最後の打ち合せをし設営は明日全員で行う事に変更し、今日中に全員伊原間に移る事にする。

夕方7時より伊原間へ移動開始。十六夜の月は海面にゆらゆらと一筋の橋をかけきれいだ。道路の悪いのにはまいった。ホコリにまみれガタゴト揺れる事一時間余り大城さんや土地の人々の出迎えを受けて全員無事到着。皆案外環境が良さそうなので安心したらしい。ミーティングを終え例の医官宿舎、保健所、公民館に分宿、いよいよ伊原間での第一夜だ。畳の上のゴロ寝には皆マイツタ事だろうがまあゼイタクは言えたものではない。

7月22日(土) 診療所設営

今日の食事は特別に我らが誇る女性軍に腕をふるってもらい事になったが朝食の感じでは満更捨てたものでもない。

早速診療所の設営にとりかかる。薬品を運んだりベッドを運んだりここでは専らリヤカーの活躍する所となる。正午すぎには八重山病院から遠心器や顕微鏡も届いて「受付」

「薬局」「検査室」「小児科」「皮膚科」「内科」の各室が整ったのは3時すぎ、後は自由時間、皆早速すぐ近くの海岸へいつて泳いだり貝を拾ったり、西間 (M4) 鄭 (M4) は山へ行き後からきた本隊の為にバイン6個をもらってきてオヤツ代をうかす。

さて明日からいよいよ診療だ。各々の役割を確認する。夜は公民館で映画の予定だったが映写機故障の為診療や栄養診断に関する説明会に変更。明日は一体どれ位の受診者がくるのだろうか。数がつかめなくてちよつと不安だ。

7月23日(日) 診療開始

診療第一日目、8時より受付を始める。受付、予診室は西間 (M4)、鄭 (M4) に清水、野口の両公看学生それに当地公看の大城さんを加え、検査室は瀬々、玉田、関、角田のM2にM3の川野、石原、野田、木戸、福重加えてM4渡辺のメンバーでスタート。最初はまばらの人も10時を過ぎると検査室は満員で検尿に採血、検血と大童である。おまけに検尿コップや試験管洗い迄だから大変だ。メランジュールの方はなおさら、ちよつと油断しているとたちまち需要と供給のアンバランスをきたす。

午後は小児科植田先生の乳児クリニックがあり教室は赤ん坊で一杯だ。

そこうする内に第一日目はまず大した問題もなく終了。ミーティングをして食事したのは午後8時過ぎ。映画係は9時よりの上映に備えてこれ又忙しい。沢山の子供を集めての映画会。おみやげの風船もひつぱりだ。こた。「海つ子山つ子」や「動物園日誌」など大喜びの子供達とは反対に汗だくのわが映写技師達ごころうさん!

7月24日(月)

予診室へ応援の為木戸 (M3) をまわし第2日目は順調なすべりだし。検査室も昨日と違って慣れてきたせいかややスムーズな運びである。それにつけても内科、小児科系は相変わらず受診者で一杯で先生方はじめ看護婦役の平野、吉田両嬢も休む暇もない状態だ。おまけに連日のこの暑さ、遅い昼食も汗をダラダラ流しながら取る様な始末である。

検尿係りの角田嬢 (M2)、決つてという言葉が「あの一、すみませんオシツコをこのコ

ツブにこの辺まで」。お蔭で皆にたてまつられたアダナが「Dr. Harn」。

7月35日(火)

今日は又大繁昌だ。締切りの正午を過ぎても受付はまだ人だかりがしている。隣村からの差入れのバインもゆつくり味ついている暇もない。検査室も大奮闘、検尿コップもメランジュールも洗う方が追いつかない。

どうやら全員終了したのはもう7時も大分過ぎてから。ミーティングを兼ねての食事は校庭の片隅の芝生の上で、一日の仕事を終えて食欲は盛んだが映画係りは食事も落ち着いてできない。今日も9時よりの上映だ。「お姉さんと一緒」、「陽気な王国」など相変わらず多くの人を集めている。一方宿舎ではあちこちでうたた寝の人を見かける。3日目ともなり旅の疲れとも重なってさすがに皆少々まいってしまったらしい。なるべく夜ふかしをしない様にしなければならないと思う。

7月26日(水)

昨日に比べると今日は少ない。今日のバインの差入れはゆつくり味わえそうだ。検査室も余裕ができ時折予診室へも手伝いにゆく。一家族7〜8人まとめたの予診取りは能率的ではあるが頭が混乱してしまう。4日目ともなつて皆も要領を飲みこんだともみえて5時すぎには全員終了。今日は映画会もお休みではあるが寄生虫卵検査は夜やらなければならない。

つい夜暇ができたばかりに近くの民家に蛇皮線を開きに行った渡辺、西間(M₄)、木戸、福重、石原、川野(M₃)振舞われた泡盛を民謡など聞きながらいい気分であらう。

につい飲みすぎて渡辺、木戸、福重の三氏沈没、大声をだして「安里屋ユンタ」「汗水筋」などを謡っている。「どうして寝たか覚えていない」とは翌朝の弁。

7月27日(木)

いつも早起きの清水嬢の「急患」の知らせで小林先生に起きてもらう。午前6時。

使いの人の話によるとここから30分位かかる平野部落らしい。患者は30才台の婦人で出血が止まらないとか。「エクトピーかな」などと話しながらひとまず止血剤その他の薬品、往診器具を準備して小林先生はオートバイの後ろに乗つていざ出発という次第。早朝から本当に御苦労様。

今日も受診者は多い。バスがくるたびに空になりかけた予診室は又一杯になる。午前10時小林先生が往診から帰られる。やはり「エクトピー」だったとの事。

午後停電で暑い中扇風機も動かない。先生方は大変だったが、映画係りは今晚上映中止で暇になる。隣家から借りたランプは案外に明るく宿舎は山小屋の感あつて皆ものめずらしげだが中には戦前派もいる事とてランプのホヤみがきなどからはじまりひとしきり昔話に花が咲く。

7月28日(金)

小児科の植田先生は昨晚より八重山保健所へ出張されて石垣市街区の乳児集団検診、伊原間は小児科休診という事になる。そのせいか受診者は以外と少なく珍しく5時以前に終了してしまつた。留守役を残して皆は久しぶりに海水浴、疲れも忘れて楽しそうである。鄭(M₄)福重(M₃)の今日の映画係りは

車で30分位かかる野底へ出張。いささかゴキゲンの悪い映写機をなだめすかして終つたのは11時頃、今までと違って野外映写会は涼しくて心地良かったが途中でのにわか雨にはこまつてしまった。傘をさしての映画会など我々には前代未聞だが子供達の笑い声を聞いてるとやる方も張り合いがある。一方伊原間では栄養診断のアンケートをまとめたり虫卵検査をやつたり。

先生方は今夜も遅く迄、異常所見のあつた個々の人に対しての今後の指導や治療について当地公看大城さんと打合せである。

7月29日(土)

昨日と異なり朝会中に既に受付にはもう人だかりが出来ている。診療もそろそろ終りに近づいたが最後迄頑張ろう!

夕方7時から我々の為に各部落の人々が夕食会を開いて下さるとの事だったが例によつて診療が終つたのは8時を過ぎていた。急いで後始末をすませ会場の公民館へ。泡盛にこりている諸氏は専らコーラやジュースを愛用。飯だけ人の分迄失敬していた様だ。舞台の上では土地の人の琉球舞踊や民謡に混じり西間氏(M4)の"炭坑節"もうけている。子供から大人迄土地の人は皆芸達者だ。

散会后三々五々近くの海岸へ、砂浜に寝ころんで波の音や流れゆく星、遅い月の出を楽しみ"福岡から1500km以上も離れているなんて....."などと語り合う。

7月30日(日)

診療最終日。伊原間中学校学童集団健診の予定。最終日になつてハブ咬傷患者が担ぎとまれてきた。30分前にヤラレたとの事てな

るほど右足背部に咬傷があり患部は紫色に腫脹している。男の子で草むらを歩いている時に襲われたのだそう。ここで那覇から持参した血清が役立ち、小林、植田、両先生の活躍される所となる。2時間位安静にさせておく。少々寒がつているが大した事はないようだ。家族が連れて帰りたいというので容体が楽つたらすぐ連絡する様に言い聞かせて帰宅させた。突然の事故にもかかわらず集健は順調に進み午後3時にはほぼ終了。ただちに薬品、医療器具の整理にとりかかる。全員でやるので仕事の進みは速い。診療が無事に日程通りすんで何となくホツとした様な又寂しい様な感じた。夜は昨晚に引き続き伊原間部落の方々が慰労会を開いて下さる。八重山名物山羊肉の屋外会食だ。これと平行して公民館では最後の映画会、婦人会との懇談会を持つ。泡盛による急性アルコール中毒?一名。

7月31日(月) 石垣島観光、講演会

持ち帰る医療器具その他を石垣港へ運び、同時に八重山病院その他からの借用品を返済する為の必要人員4名と二日酔いの1名を残し他はマイクロバスで石垣島観光へ出発。野やし林、川平公園——川平では診療中手伝つてもらつた公看の古見さんにも会う——をへて石垣へ。昼食をすませ全員で近くの竹富島へでかける。古い伝統と八重山上布で有名な島。棧橋近くでみた群青色の熱帯魚が印象的だ。中には海水着がなくてくやしがつている人もいたが皆休日を十分に楽しんでいるようだ。

夕食も石垣で取る。今夜は市の文教会館で小林、植田、矢幡の各先生の講演会及び「成人病問答」その他の映画会が催される。先生方はじめ学生7名を残し他は伊原間へ先に帰

る。伊原間の洞窟探検の予定だ。公看の大城さんを加えた探検隊は留守役に訳あつて今日一日中留守役を務めた野田(Mヨ)の他2名を残して意気揚々と出発。10時頃我々にとつて最後の患者がくる。自転車で転倒してあちこち擦りむいている。うち一人は台湾から出稼ぎに来ているのだそうだがみた所17、8才頃の少年だ。手当をして明日も来る様にいつて帰す。ここでは留守役の平野嬢の活躍する所となつたがこれでは大城さんも大変だ。うかつに留守もできやしない。

ふぐや珍しい小魚を戦利品に下半身、中には胸のあたりまでビショぬれの探検隊が帰つてきたのは11時すぎ、やや興奮のおもちだ。早速持帰つた魚を焼いてもらつて味わつている。さぞ美味しい事だろう。

伊原間での最後の夜——大城さんの所でも遅く迄話し声や笑い声がきこえている。

報告によると今晚の講演会は多くの人を集めて大成功だつた由。

本日山川厚生局長より電報あり。「エンシヨノオリ、シンリヨウノゴ クロウニカンシヤシ、ゴ ケントウライノリマス」コウセイキョクテウ

8月1日(火) 石垣発

午前10時伊原間発。部落の人達や大城さんを加えて記念撮影をすませ、例のガタガタバスで出発する。短期間ではあつたが住み慣れた部落を去るのは又寂しいものだ。仲良しになつた子供達も後をおつてくる。バスはいつもの調子でひどく揺れ、オデコをぶつけたり席から落ちたり全く危険この上ない。これじや土地の人が「胃腸返し」と呼んでいるのも当然だ。飛行機で先に那覇へ飛ばれた矢幡

、上木の両先生、仕事で黒島へ行かれた吉村研修生を除く全員が石垣島最後の昼食を速く珊瑚礁のみえるレストランで取る。「那覇丸」が遅れ出航が7時になり午後自由行動。皆はつりにいつたり、買物や海水浴はては昼寝にいつたりで最後の石垣島を楽しむ。

夕方6時半上船。皆の気をさんざんもましておいて出航直前に例によつて悠々と現われた大城さんをはじめ島の人々の御見送りをうけ船が石垣を出航したのは7時15分、後に残つた色とりどりの風船が暮れかかつた波間に漂よつている。船は琉球海運の御好意でサロンを使わせてもらつたが波はやや荒い程度だ。

8月2日(水)

全員無事那覇着。急に周囲は車や人が多くなり都会へ舞い戻つた感じでおまけに今まで気にならなかつた暑さがこたえる。宿舎へ荷物を選び後は自由時間。短かい那覇滞在であちこちへの挨拶廻りや買物などで皆忙がしそう。コザまで速出する人達もいる。

旅館では那覇市内開業の諸先輩からの差入れのビールやコーラをあげながら皆のおしゃべりがはずんで三々五々帰つてくる連中も加わり中々終りそうもない。

8月3日(木)

午前中南部戦跡、琉球大学、琉球特産の紅型工場や染物展など忙しいなかを時間一杯使つて見学する。戦跡——あちこちに乱立する慰霊塔よりも眩しいばかりに照りつける南国の太陽の下、何事もなかつた様にはるか水平線迄続く気の遠くなる様な紺碧の海と白く波打つ磯、続いてそそりたつ弾痕の残る断崖絶

壁の方がむしろ戦争の激しさ、玉砕せねばならなかった当時の有様を思い起こさせる。

午後4時出航、例によつて上船前の忙しい事、買物もゆつくり出来ない。初めての人にはもう一日位欲しかった事だろうが船便の都合だから仕方がない。船は「おとひめ丸」で鹿大の診療団も一緒だ。皆よほど平生の心掛けが良いせいか少しも揺れない。「少し位風でも吹けばいいのに」とは影の声。

皆の各々の想いを乗せ船は沖縄を後に一路鹿児島へ。外海は相変らず美しい。水切つて進む船首に白く泡立つ波、すいこまれそうだ。

8月4日(金)

船上からの朝日——雲に遮られてみられないが朝焼けが美しい。今日はいよいよ鹿児島だがその前にあのやつかいな税関手続がある。多くの荷物をかかえて初めての方はやや不安そう。本当にこういうものは早くなくなれば良いと思う。全員が手続を終えて上陸したのは午後2時。ここで又例の慌しさが待つていようとは！西鹿児島駅へ荷物を運ぶのに三輪車迄借りての奮闘は野田(M3)、その後も遅れじとブダブダに駅へ駆けつけプラットフォームへ出たが肝心の荷物が間にあわなくて臨時急行は見送り、全員「第二かいもん」で帰福する事に決定しそれ迄各自で腹拵えをしたり銭湯へ行つて汗を流したり。

帰りの車中、居眠りが目立つ。さすがに皆疲れたらしい。それよりも目立つのが皆の色の黒さ。我ながらよくもこう……と思う。皆全く同感だろうが健康で何よりだ。午後11時すぎ無事帰福。黒ん坊集団の到着だ。まずは全員無事でめでたしめでたし。皆様お疲れさま!!

(M3 福重記)

診療報告

診療は、伊原間中学校を開放して頂き、各教室を待合室、予診室、検査室、処置室、内科、小児科、皮膚科、薬品室などにおいて実施した。

内科には医師2名と研修生2名、計4名、小児科1名、皮膚科1名。学生の分担は、4年生が予診係、3年生が血計、検便係、2年生が検尿、心電図係などを主とし、同行した看護婦4名の他に、現地の公衆衛生看護婦2名、養護訓導1名と、更に受付には各部落の世話人の協力をえた。

診療は、1967年8月22日に設営や各係を決め、翌23日から30日までの8日間、石垣島の中部以北の13部落を1〜3部落ずつ対象として行なつた。

診療方針は、特殊な人を除いて1回だけの人が多いので、大学の外来に準じて、1人1人を出来るだけ丁寧に診察するように努めたが、更に、日常医療に恵まれない生活の中で、健康な生活を維持するには、この人の場合はどうするのがよいかなど、出来るだけ具体的にわかりやすく説明するように心掛けた。

(小林譲記)

検診対象

	男	女	計
内 科	294	454	748名
小 児 科	360	329	689
(内乳児クリニック受診者)	27	28	55
皮 膚 科	70	82	152
伊原問学校健康診断	127	126	253
計	878	1019	1897

表-1 科別受診者数

これを年齢別に区分してみると表-2の様になる(伊原問学校健康診断を除く)

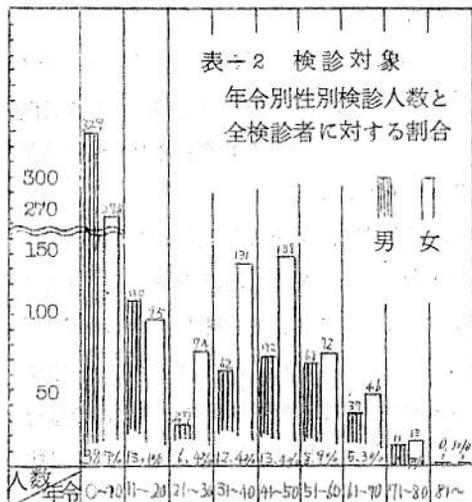


表-2に示した様に20才以下が全体の受診者の53%近くを占め、特に小児科領域の15才以下が全体の50%近くを占めていた。それに比して20才代は6.4%と著しく少ない。

壮年層は女子に比して男子が半数位に留まった原因の一つは、パインの収穫期で、当該部落の受診日に手をはせずせなかつた人がかなりいたためではないかと思われる。

主 訴

全受診者のうち何らかの訴えをもつていた人は、全体の約半数の790名であり、特に多かつた訴えは表-3に示した如くである。

表-3 主 訴

主 訴	人 数	全受診者 に対して
全身倦怠感	222名	15 %
め ま い	105	6.5
腹 痛	99	6.3
皮 疹	90	5.8
頭重・頭痛	88	5.4
神 経 痛	78	5.0
どうき・息切れ	62	4.3

その他関節痛、胸やけ、食思不振、喀痰などが多かつた。これは貧血、高血圧、低血圧、肝腫大、各種神経痛などの疾患が多かつた事とあわせて興味あると思う。

既 応 歴

既応歴のうちとくに注意して調べた風疹、マラリア、ハブ咬傷、フィラリア症では表-4の如き成績を得た。

表-4 既 応 症

	男	女	計
風 疹	74	96	170名
マラリア	157	43	200
フィラリア症	49	47	96
ハブ咬傷	25	15	40

これらのうちマラリアの既応を持つた200名はとくに壮年層以上にかなりの高い頻度でみられた。フィラリア症も96名にみられたが後遺症を有している者は比較的少数であつた。

風疹は二年程前沖縄一帯で流行した時罹患し

たものでその既応をもつ者はマラリアについて多かつた。

この時胎内にいて、生後、先天性風疹症候群を示した者が2名みられた。

ハブ咬傷の既応をもつ者は期待値より少なかった。

生活歴

特に本土と変つた点はなかつた。成人女子について調べた初潮年齢は17才、18才にそのピークを見たが、これは本土の平均より2

年程遅いようである。

家族歴

特記すべきことはなかつた。当所は開拓部落のため、他の八重山群島、宮古群島、沖縄本島などから集つてできた部落のため、血族結婚なども少かつたようである。

血圧

40才以上の全受診者について行なつた結果をまとめてみると表-5のようになる。

表-5 年齢別 性別血圧区分

年 令	性	被 検 者 数	正常血圧者 (人数)		高 血 圧 (人数)				低血圧 (人数)
			収縮期性		拡張期性		合 計		
			110 ≤ sys < 150 かつ Dia < 90	sys ≥ 150 かつ Dia < 90	sys < 150 かつ Dia ≥ 90	sys ≥ 150 かつ Dia ≥ 90		sys < 110	
40~49	男	65	33	1	2	5	8	24	
	女	122	83	3	0	6	9	30	
	計	187	116	4	2	11	17	54	
50~59	男	60	32	3	4	7	14	14	
	女	74	41	7	0	10	17	16	
	計	134	73	10	4	17	31	30	
60~69	男	72	19	4	2	9	15	38	
	女	41	18	9	0	9	18	5	
	計	113	37	13	2	18	33	43	
70~79	男	20	3	3	0	4	7	10	
	女	15	4	8	0	2	10	1	
	計	35	7	11	0	6	17	11	
80~	男	2	1	1	0	0	1	0	
	女	2	1	0	0	1	1	0	
	計	4	2	1	0	1	2	0	
合 計	男	219	88	12	8	25	45	86	
	女	254	147	27	0	28	55	52	
	計	473	235	39	8	53	100	138	

これを年齢層別全受診者に対する高血圧、低血圧、正常血圧者の割合を表わしてみると表-6のようになる。

表 - 6

年 令	被 検 者 数	正常血圧 者の割合	高 血 圧 の 割 合		低血圧の 割 合
			収縮期性	拡張期性	
40 ~ 49	187	62.0 %	2.1 %	7.0 %	28.8 %
50 ~ 59	134	54.5 %	7.4 %	15.6 %	22.5 %
60 ~ 69	113	32.7 %	11.5 %	17.7 %	38.1 %
70 ~ 79	35	20.0 %	31.4 %	17.1 %	31.5 %
80 ~	4	50.0 %	25.0 %	25.0 %	0 %

(注) 80才台は対象が少ないので考察の際は無視してもよい。

この表でわかる様に高血圧の者は40才台で9.1%にみられ、50才台では23.0%と2倍近く増加し、70才台に至つては48.5%と半数近くが高血圧を示している。後にもふれるけれども、これら高血圧を示した者のうち90%強は腎障害を伴なわないいわゆる良性であつたが残りの10%弱には、尿蛋白、尿沈渣、眼底所見等に異常所見がみられた。

尚高血圧の区分で年齢が上昇するにつれ拡張期性のもから収縮期性のものへの移行がみられるのは、動脈壁の硬化性病変が進んでいくのを示唆している。

全体的にみて高血圧者の頻度は $\frac{100}{473}$ で21.1%、本土20~23%に比してむしろ低目であつた。

低血圧者は全国平均発現率のデータがないので比較出来ないが、40才台で28.8%、50才台で25.5%、60才台で38.1%というのは、かなりの高頻度であるといつて良いであろう。事実本土近畿山村に於ける無医地区での調査では、40才台で8%、50才台で13%、60才台で6%が低血圧を示しているにすぎない。このように低血圧の者が多かつた原因として、栄養バランス調査に

もみるように、栄養摂取の不均一性、夏の炎天下における農作業による過労、季節的なものなどがあげられると思う。

次に40才以上の全被検者473名を年齢別性別にわけて、なべて平均した値を示すと表-7のようになる。

表-7 年齢別性別血圧平均値

年 令	収縮期血圧		拡張期血圧	
	男	女	男	女
40~49	120	124	71	72
50~59	131	132	73	76
60~69	145	144	83	82
70~79	153	157	87	72
80~	161	179	71	92

単位はmm Hg

これをグラフにすると表-8の様になる。

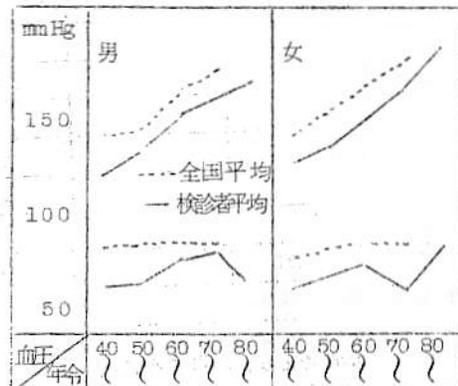


表-8に示したように男子においても女子においても、各年代とも収縮期圧が全国平均より15 mm Hg 近く低く、拡張期圧が全国平均より10 mm Hg 近く低く、一見理想的であるがこれは低血圧の人が大変多かった事が大きな原因であろう。

(M3 野田記)

内 科

疾患の種類は、以下表に示したように、多種多様であつて、この地方独特あるいは日本内地では余りないフィラリア症やハブによる咬傷などを除くと、いずれもわれわれが日常接している疾患が大多数を占めた。しかし、その内容は、貧血、肝腫大、高血圧、神経痛、腰痛、関節痛、筋肉痛など、いわゆる農夫病などと呼ばれるものが主で、殊にそれらが亜熱帯の強い日差しの中での農作業による消耗と食生活とのアンバランスに基因して、強く現われていたように思う。

呼吸器疾患

第1表 呼吸器疾患

疾患名	男	女	計
喉頭ポリープ	0	1	1
普通感冒	2	1	3
慢性気管支炎	4	2	6
喘息性気管支炎	1	0	1
気管支喘息	3	4	7
気管支拡張症	1	0	1
肺気腫	3	1	4
肺結核	2	2	4
合計	16	11	27

戦後、石垣島の公衆衛生上最も進歩したものの一つに結核検診がある。琉球政府の結核検診車が配置され、八重山保健所が中心となり、70mmフィルムによる間接撮影を大部分の島民に行なうほか、結核に対する健康診断や治療はかなりに行き届いている。

循環器、血液疾患

第2表 循環器、血液疾患

疾患名	男	女	計
高血圧症	28	38	66
腎臓病を伴うもの	3	2	5
腎臓病を伴わないもの	21	35	56
不明	4	1	5
低血圧症	9	21	30
動脈硬化症	8	12	20
先天性心臓病	3	5	8
心臓弁膜症	4	4	8
僧帽弁閉鎖不全症	0	1	1
僧帽弁狭窄症	1	0	1
僧帽弁閉鎖不全症	0	2	2
大動脈弁閉鎖不全症	3	1	4
不整脈	2	1	3
心臓神経症	0	2	2
右胸心	1	0	1
脳卒中後遺症	1	3	4
貧血	7	58	65
合計	95	186	281

循環器疾患

高血圧症が最も多く、66例で、その大部分は腎障害を伴わない(尿に異常所見のない)、いわゆる良性の高血圧であつた。しかし5例は尿の蛋白、沈渣に異常を認め、かつ眼底や心電図にも異常所見を認めるものがあり、これらはその後の健康管理が必要と思われた。ついで、目まいや疲労時の頭痛などを主訴としてくるものに、低血圧を示すものが多かつたが、これらの人達は暑さと過労に加えて貧血を合併したものが多く、生活と密接な関係を有しているものと思う。また先天性心臓病と後天性心臓弁膜症は、それぞれ8例、計16例見出されたが、これらの内訳は表の通りで、先天性心臓病の中には精密検査のうえ、手術の適応があると思われるものもあつた。

動脈硬化症や高血圧および低血圧などを伴つたものでは、診療第1日目と第2日目で、40才以上のはほとんど全例に心電図による検査を行なつたが、STあるいはST・Tの軽度低下を認めるものがかかなり多かつたのは注目に値する。

血液疾患

診療期間を通じて、最も注目をひいた所見の一つに貧血があつた。特に婦人において顕著で、表に示したものは中等度ないし高度の貧血を伴うものであるが、それ以外にも血色素量(ザリー法)70~80%の境界領域を示すものが極めて多いことは注目に値する。その原因については種々の因子が関与しているものと思うが、これらの人についての腸管内寄生虫の検出率は必ずしも高くなく、また血液像にも好酸球増多の所見を認めるもの

は余りないことから、鉤虫などによると思われるものを除いた多くのものでは、日本内地とは比較にならない程の炎天下での農作業による消耗と、摂取する栄養のアンバランスがこのような面に最も強く表われているものと思う。

消化管疾患

(第3表)

疾患名	男	女	計
口内炎	5	4	9
舌炎	1	1	2
慢性胃炎	13	15	28
胃潰瘍	2	2	4
十二指腸潰瘍	2	3	5
腸炎	5	2	7
急性虫垂炎	2	1	3
慢性虫垂炎	0	1	1
内臓下垂症	1	10	11
移動盲腸	0	1	1
臍痛	5	9	14
習慣性便秘	0	4	4
下痢	2	0	2
痔疾	4	3	7
肛門脱	1	0	1
ヘルニア	5	0	5
臍ヘルニア	2	0	2
{ 臍径ヘルニア	2	0	2
腹壁ヘルニア	1	0	1
合計	53	56	109

悪性腫瘍と思われるものは見出されなかつた。最も多かつたのは慢性胃炎の28例で、その他胃下垂、口内炎、痔疾などであつた。消化管系統では特に目立つたことはなかつた。

肝・胆道疾患

全身倦怠や疲れやすいなど、不定の愁訴を持つもののうち、特に注目された所見の一つに肝腫大がある。表に示すように136名で、男女ほぼ同数、しかも腫大に伴つて硬度もかなりの程度に増じていた。炎天下での外来診療では尿のウロビリノゲンも余り目安とはならず、肝機能検査や血清蛋白分画の測定などもなし得なかつたが、わが国内地でも東北地方辺りに比して九州地方の方が肝硬変の発生率が高く、これが沖縄南端では一層著明となるのではなからうか。その発生要因については成人の場合、気候と食生活の影響などが最も考えられる。

(第4表)

疾患名	男	女	計
慢性肝炎	1	4	5
肝腫	66	70	136
肝脾腫	3	2	5
胆嚢炎	0	2	2
合計	70	78	148

肝腫大について特記すべきものに、弱年者の肝腫大の問題があつた。診療に先立つて、石垣市長から特に依頼があり、診療中も注意していたところ、表に示すような3例に肝硬変を伴つた高度の腫大が認められた。これらの3例は血液像においていずれも好酸

球増多を示して同一の原因によるものと思われ、成人の肝腫大を伴つたものでは好酸球増多を伴つたものがなかつたことと著しい相違を示す。その原因については、寄生虫によるものではないかと考えられるが、糞便の虫卵検査はいずれも陰性で、今後更に原因の解明を必要とするものの一つである。なお、これらと同様な症状を示すものの検索を中心として、伊原間中学の生徒368名の健康診断を行なつたが、これらの生徒のうちには定型的なものは見出されなかつた。

神経、筋肉、骨、関節疾患

(第5表)

疾患名	男	女	計
背椎カリエス	1	0	1
慢性関節リウマチ	4	2	6
慢性関節炎	2	4	6
Perthes病	1	0	1
手根関節強直症	1	0	1
肩こり	3	2	5
五十肩	7	6	13
先天性股関節脱臼	1	0	1
椎間板ヘルニア	1	0	1
斜頸	1	0	1
腰痛	15	7	22
外骨症	0	1	1
骨折	1	1	2
合計	38	23	61

第6表 神経系疾患

疾患名	男	女	計
神経痛	11	16	27
{ 肋間神経痛	0	1	1
{ 坐骨神経痛	5	10	15
{ その他	6	5	11
顔面神経麻痺	1	2	3
頸腕症候群	0	2	2
てんかん	2	5	7
脳性麻痺	2	0	2
Parkinson症候群	0	2	2
自律神経失調症	1	4	5
片頭痛	4	5	9
多汗症	0	1	1
企図振戦	1	0	1
神経症	1	0	1
合計	34	53	87

成人の受診者のほとんどすべてが農業であるため腰痛、坐骨神経痛、肩や手足の関節痛や筋肉痛を訴えるものは極めて多い。これはわが国内地の、殊に山間部で農業や林業を営む地域でも高率に認められるが、今回の診療地域では夏季がパインの収穫などによる農繁期にあたるため、一層顕著に認められたのかも知れない。

また診療期間中、夜間に1学童が戸外で遊んでいるうちに転び、右肘関節を打つて急患として来たが、整形外科の専門家がいなかったためお手あげの形で、初め脱臼かと考えて整復術も試みようとしたが、レントゲンもないので、翌日までシーネを当て、翌日八重山病院へ連れて行つたところ同部の骨折であった。

こうした診療には外科領域の専門家の参加が望まれるところである。

附) なお、真性てんかんが7例見出されたが、これらの患者の治療や生活指導は現地では解決しえない問題の一つである。

内分泌疾患(第7表)

受診者のほとんど全例に検尿を行なつたこともあつて、3例の糖尿病患者が見出された。うち2例はすでにその存在を患者自身が知っていたが、1例ははじめて見出されたものである。このような症例については、今後長期間にわたる食生活を中心とした指導や計画的な薬物療法の必要があるが、血糖検査にしても思うにまかせず、また島での限られた食品、更には農繁期には猫の手も借りたい程の忙しさを思う時、果してこの様なところの実状にあつた糖尿病の治療はどの様にすべきか、現実には余りにも厳しすぎるようである。

第7表 内分泌疾患

疾患名	男	女	計
糖尿病	0	3	3
肥胖症	0	6	6
合計	0	9	9

その他の疾患

現地でも、福岡へ帰つてからも、「何か珍らしい病気がありましたか」と尋ねられる。しかし、全体として眺めると、特に珍らしい病気はなかつた、と答えるべきであろうと思つている。強いて求めれば、乳尿あるいは乳血尿を伴つた数例のフィラリア症の患者や、診療最終日の朝、慌しくかつぎこまれたハブによる咬傷を受けた中学生などである。

第8表 泌尿・生殖器疾患

疾患名	男	女	計
慢性腎炎	2	4	6
ネフローゼ	1	0	1
遊走腎	0	1	1
尿管結石	1	0	1
膀胱瘤	1	0	1
尿道炎	1	0	1
膀胱炎	0	3	3
前立腺肥大	3	—	3
睾丸炎	1	—	1
陰囊水腫	2	—	2
卵巣腫瘍	—	1	1
子宮外妊娠破裂	—	1	1
妊娠中毒症	—	2	2
不妊症	0	1	1
不整性器出血	—	3	3
月経困難症	—	1	1
乳腺症	0	2	2
女性乳房	1	—	1
更年期障害	—	3	3
合計	13	22	35

第9表 耳鼻咽喉科疾患

疾患名	男	女	計
鼻出血	4	1	5
慢性鼻炎	0	1	1
慢性中耳炎	8	7	15
Meniere氏病	1	0	1
難聴	0	2	2
扁桃炎	1	0	1
咽頭炎	0	1	1
合計	14	12	26

第10表 眼科疾患

疾患名	男	女	計
結膜炎	7	2	9
トラコーマ	0	2	2
白内障	2	1	3
麦粒腫	0	1	1
逆睫毛	0	1	1
小眼症	0	1	1
内斜視	0	1	1
合計	9	9	18

第11表 その他の疾患

疾患名	男	女	計
Hansen氏病	1	1	2
梅毒	1	0	1
水痘	1	0	1
蜂窩織炎	0	1	1
癩	1	0	1
リンパ腺炎	4	2	6
精神発達障害	2	0	2
先天性風疹症候群	1	1	2
言語障害	0	1	1
ハブ咬傷	1	0	1
蟻虫症	6	6	12
フィラリア症	3	4	7
(このうち象皮病)	(0)	(1)	(1)
合計	21	16	37

(小林談記)

小児科の立場から

伊原間における検診で、検診総数1897例のうち小児15才以下749例であり、当初検診のスケール、また小児科検診にあたる人数、住民がどのような状態であろうという予想がつかなくかつたため、計画性にとぼしかつたので、ここに正確なデータをもつて報告することはできないが、その印象をのべる。

1 乳児検診

対象：伊原間地区の乳児、男27、女28例 計55例である。

母親の年齢：21～35才までの間が大多数でとくに年齢の低い母親やとくに高年齢であるものはまれであつた。

同胞の人数：第何子であるかをみると、第1子～第8子にわたるが、第2子が最も多く20例、第3子12例、第5子8例であつたが、当地の家族計画のありかたを知る一つの材料となるであろう。

生下時体重：平均は3075g（男3147g、女2914g）で低出生体重児は4例（7%）であつた。

体重：乳児の体重は健康と発育を知る大きな指標となる。検診時測定した53例の体重を標準体重（昭和35年、九大小児科）と比較すると標準以上あるもの32例、標準以下21例であり、やゝ小さい印象をうけるが順調な発育をしている。

疾患：先天性心疾患の1例をのぞいて、注目すべき疾患はなかつた。湿疹もすくなく、乳児は皮膚の手入れも比較的良好であつた。

2 幼児・学童

全体的に体格が小さい印象をうけた。乳児がよく手がゆきとどいていたのに対し、幼児・学童は放置され、不潔が目立ち、膿皮症がきわめて多かつた。また栄養のアンバランス、ビタミンの不足、口腔内の不潔などにより、口角ピランが目立つた。疾患の集計は成人のそれに含まれ、今回はそれをわけて成績を示すことができない。

3 肝腫大について

石垣市より肝腫大をみとめることもがあるが調査を依頼されたので、これに注意して検診を行つたところ、3例を発見した。症例3は以前に肝腫を指摘されているが、この症例以外は自覚症なく、硬度のました肝を3～4横指ふれる。尿に異常なく、血液像で症例1にエオジン好性白血球の増加（25%）を認めた。肝機能は正常。寄生虫疾患を考えさせるが、さらに検討が必要な症例である。

4 先天性風疹症候群

1964～1965年に沖縄地方に風疹の大流行がみられ、1965～1966年に沖縄本島で100例以上の先天性風疹症候群患児の発生をみたが、八重山群島ではどうであろうかという疫学的の興味から調査を行つた。

風疹罹患妊婦の人工流産：石垣市の八重山病院では40例、某開業医では30例が妊娠中の風疹罹患のため人工流産をうけており、ほぼ100例がこの目的で人工流産をうけたと推定される。

妊娠中風疹に罹患した母親から生れた子どもの検診：八重山保健所において行つた検診で、29例が受診し、そのうち風疹罹患の既往のないもの4例（脳性まひ）あり、風疹

肝腫大の3症例
伊原間における健康診断 (1967/7/23 - 30)

☆ 症 例	① 照○幸一	② 入○部○一	③ 謙○村○美○
性 別	♀	♂	♀
年 令	7 才	8 才	11 才
主 訴	訴えなし	訴えなし	2年前肝臓がわるいといわれた。右臀部に白斑。
肝 腫 大	4横指 辺縁鋭, 硬度増	4横指 辺縁鋭でない 硬度増	3横指 硬度増, 辺縁鋭でない。
その他の所見	なし	なし	臀部に白斑 (痛覚は正常)
検 査 所 見			
尿	正 常	正 常	正 常
便	虫卵 ⊖	N D	N D
血液像 R	360×10^4		422×10^4
Hb	62 %	64 %	76 %
W	4200	7550	8000
St	13	7	11
Seg	36	50	50
L	26	37	32
M	2	3	2
E	23	3	5
B	0	0	0

☆ 伊原間中学400例のうち異常の肝腫大を認めたものはない。

罹患の既往をもつ25例のうち正常11例、難聴9例、難聴および心疾患4例、脳性まひ1例であった。なお1才5カ月で死亡した白内障、心疾患、難聴、発育遅延の定型的症例もあり、当地にも先天性風疹症候群の発生があったが、産科医の指導よく、妊娠初期に風疹に罹患したものには人工流産が行われ、重症例の発生は少なかったようである。

まとめ

- 1) 乳児保育は比較的良好であったが、乳製品の使用が本土にくらべると大変すくない感じがあり、離乳の状態、人工栄養と母乳栄養の比率などの調査が計画されるべきであろう。
- 2) 幼児・学童：放置の傾向がつよい。食餌、清潔という点で考慮がなされるべきで、これにより体位の向上もはかられると思うし、

また膿皮症、口角ピランもなくなるであろう。これには生活の向上安定が第1の条件だと考えられる。

3) 肝腫：想像したより多くなかったが、原因の究明は大切な仕事で、今後の1つの調査の重要な目的となる。

4) 先天性風疹症候群の多発：おそらくアジアでは記録にのこる最初のものであろう。当地方にもその障害をもつこどもが発生しており、とくに難聴児の今後の指導が、これら患児に対する前向きな仕事となるが、このような悲劇は、これが最後の記録となるよう、風疹流行時は注意しなければならない。

(植田浩司記)

皮膚科

沖縄八重山群島石垣島石垣市伊原間部落で行った九大医学部熱帯医学研究会主催の無医村診療に参加し、皮膚科を診察しその結果および感想をここに述べる。

診療の結果、診断した病名は別表の通りでとくに変わった疾患はなかった。

まず、湿疹・皮膚炎群(第1表)では、亜熱帯地方の気温の高い時期であつたためか、小児の汗疹性湿疹が多少多いように感じた。また小児の痲皮性湿疹は日本本土ではあまり最近見かけないものであるが男児に10例もあつたのは、栄養の悪さを物語るものと考えられる。

接触性皮膚炎は全例とも足背部のもので、これはゴム草履の花緒によるもので、いわゆるゴムヅウリカブレであつた。全例のほとんどが、すでに慢性化したもので、臨床症状としては接触皮膚炎とは言いがたいものであつ

たが原因より接触皮膚炎と診断している。

第1表 湿疹・皮膚炎群

疾患名	男	女	計
急性湿疹	5	11	16
亜急性湿疹	0	2	2
慢性湿疹	6	4	10
脂漏性湿疹	0	1	1
汗疹性湿疹	3	1	4
痲皮性湿疹	10	0	10
亀裂性湿疹	1	0	1
膿痲疹性湿疹	1	0	1
尋常性湿疹	1	0	1
アトピー性皮膚炎	6	5	11
接触皮膚炎	0	14	14
日光皮膚炎	0	3	3
汎発性湿疹	1	0	1
合計	34	41	75

膿皮症(第2表)のほとんどは小児で、これは皮膚の不潔さから来たものと考えられた。

第2表 膿皮症

疾患名	男	女	計
皮下膿瘍	2	1	3
膿皮症	10	7	17
掌蹠膿疱症	1	0	1
膿痲疹	4	4	8
痲腫症	3	2	5
痲腫症	0	4	4
化膿性汗腺炎	1	0	1
化膿性創傷	1	0	1
合計	22	18	40

皮膚白癬(第3表)は意外に少なかったの

は、(とくに汗疱状白癬については)日常あまり靴などをはく機会が少ないためと考えられる。こゝで著者の注意を引いたのは、頭部浅在性白癬が1例もみられなかつた点である。著者は昨年(昭41)に沖縄中部地区の学童検診に参加し、その時本症が非常に多くみられたので、今回も期待したのであるが、対象は学童ではなかつたためか、本症を1例も発見することが出来なかつた。

第3表 皮膚白癬

疾患名	男	女	計
汗疱状白癬	1	6	7
瓜甲白癬	0	1	1
瓜真菌症	0	2	2
頭癬	1	3	4
砂毛	0	1	1
合計	2	13	15

その他の疾患(第4・5表)について、石垣地方に特有のものはみられなかつた。ただハンセン氏病については当初から可成りの注意を払っていたが、類結核型と思われる患者を3例発見したが、精査も出来ぬため、ス

第4表 その他の疾患

疾患名	男	女	計
エリテマトーデス	0	1	1
頭虱	0	18	18
火傷	0	2	2
白斑	0	1	1
顔面単純性枇糠疹	8	0	8
擦過傷	1	1	2
遺伝性新色素異常症	0	1	1
合計	9	24	33

第5表

疾患名	男	女	計
角化症			
尋常性乾癬	1	0	1
皮膚腫瘍			
伝染性軟属腫	0	1	1
尋常性疣贅	0	2	2
皮膚母斑			
色素性母斑	1	3	4
脂腺母斑	1	0	1
血管腫	1	0	1
神経皮膚症・麻疹			
慢性麻疹	1	0	1
小児ストロフルス	2	1	3
汗腺異常			
汗疱	2	1	3
汗疹	17	15	32
合計	26	23	49

クリーニングに終っている。

全般的な感想としては、住民一般において入浴の回数が少ないためか、皮膚の不潔なものが目立ち、とくに小児にこれが著明であつた。女兒の頭虱の18例はこのことを如実に物語るものである。

熱帯医学研究会の主催であるので、熱帯地方に特有な皮膚疾患が多いのではないかと言う期待は全く裏切られ、全体として、特徴のある皮膚疾患は皆無であつた。

(矢幡敬記)

研 究 報 告

1. 石垣島住民の日本脳炎ウイルスに対する抗体保有調査

1967年7月下旬、石垣島住民の日本脳炎ウイルスに対する抗体保有状況を赤血球凝集抑制反応によつて調査した。検査対象140例中、63例、45.0%が陽性であつた。しかし、これを年齢別にみると、14才以下の59例はすべて陰性、15才から19才までの5例のうち1例、20.0%陽性、20才以上の76例では62例、81.6%陽性と、年齢と陽性率との間に特異な関係が認められた。

すなわち、陽性例の最低年齢は16才であり、15才までの60例がすべて陰性であつたことは、近年この地方では日本脳炎ウイルスに対する感染機会がなかつたことを示すものであり、他方、20才以上のものが81.

6%の陽性率を示し、しかも土着者と移住者とを比較しても、その間にほとんど差が認められなかつたことは、かつてはかなり濃厚な感染機会があつたことを推定させる。

このような現象が起つた原因を俄かに断定することは出来ないが、同島はかつてマラリアの流行地であり、戦後、マラリアの防あつ対策のため、徹底的な蚊の撲滅に努力した結果、マラリアも終息したが、これとともに日本脳炎ウイルスも絶滅したのではないかと推測される。

これらのことから、日本脳炎の予防に蚊の徹底的駆除は極めて重要であることを改めて認識する必要があるとともに、日本脳炎ウイルスは渡り鳥によつて年々南方の流行地から移入されるものではないであろうということ、さらには、沖縄本島や日本本土における日本脳炎ウイルスは、それぞれの地域で越冬するであろうこと、ならびにその越冬は蚊によつて行なわれるであろうことが考えられる。

石垣島住民の日本脳炎ウイルスに対する赤血球凝集抑制抗体価

年 令	性 別		総 数	赤 血 球 凝 集 抑 制 抗 体 価							陽性 数	陽性率 (%)
	男	女		<10	10	20	40	80	160	320		
0-4	7	1	8	8							0	0
5-9	14	11	25	25							0	0
10-14	20	6	26	26							0	0
15-19	4	1	5	4	1						1	20.0
20-24	1	0	1			1					1	100.0
25-29	0	4	4	2		1		1			2	50.0
30-39	6	14	20	5	5	4	2	2	2		15	75.0
40-49	6	15	21	3	3	3	6	5	1		18	85.7
50-59	12	5	17	3	1	2	3	5	2	1	14	82.4
60-	6	7	13	1		1	3	2	4	2	12	92.3
Total	76	64	140	77	10	12	14	15	9	3	63	45.0

このことは、日本脳炎ウイルスの自然界における動態を探るうえに重要な意義があり、日本脳炎の疫学、ならびに予防のうえにも極めて示唆に富む資料であると考えられる。

他方、抗体の持続期間の問題については、160倍ないしそれ以上の高い抗体価を示した12例の血清について2-mercapto-ethanol 処理をしたところ、いずれも低抗性であったことを併せ考えると、長年の間に繰返して感染を受けた場合、それが不顕性感染であっても、10年位の後に、160倍ないし320倍という、かなり高い価を示す場合があることが明らかとなった。

また、このような地方の学童が、沖縄本島や日本本土の学校へ入学したり、就職する場合は、日本脳炎ワクチンの接種をしておく必要がある。(小林譲、上木良輔、草場公宏、一木隆)

2. レプトスピラおよびリケッチアに関する研究

1967年7月25日から同月31日までの間に、石垣島伊原間地区で捕獲したドブネズミ *Rattus norvegicus* 28頭の脾と腎を摘出、その1~4頭分を1群にプールし、生理食塩水で10%乳剤を作り、dd系マウスの腹腔内に0.5ml ずつ接種した。

ついで、これらの被接種マウスの経過を観察し、21日後に採血したのち、さらにそれらの脾と腎を摘出して次代のマウスへ接種するとともに、被接種マウスがレプトスピラに対する抗体を保有していた群では、200~250gのモルモットの腹腔内へも、同じ材料を3ml ずつ接種した。

採血によつてえた血清は、*Leptospira icterohaemorrhagiae*, *L. canicola*, *L. autumnalis*, *L. hebdomadis*, *L. australis* A, *L. pyrogenes*, *L. bataviae*, *L. andaman* A, *L. pomona*, *L. Semarang*, *L. grippityphosa* および *L. javanica* の12種のレプトスピラを抗原とする凝集反

石垣島伊原間地区のネズミ*調査成績

年月日	群	頭数	Leptospira	Rickettsia orientalis
'67. 7. 25	1	1	<i>L. javanica</i>	—
28	2	3	<i>L. javanica</i>	—
28	3	3	—	—
29	4	4	—	—
29	5	4	—	—
29	6	3	<i>L. javanica</i>	—
31	7	4	—	—
31	8	3	<i>L. javanica</i>	—
31	9	3	—	—

* ネズミ : *Rattus norvegicus*

応、ならびに *Rickettsia orientalis* (Gilliam 株) のエーテル処理によつて作成した 群特異性可溶性抗原 を用いて補体結合反応を行ない、抗体保有の有無を検索した。

その結果、レプトスピラに対しては、9系統のうち4系統が *L. javanica* に対して抗体の保有を認めたので、これらの系統については、被接種モルモットの経過を観察するとともに、接種7日後に心血から Korthof 培地を用いてレプトスピラの分離培養を行ない、さらに接種1ヶ月後に採血して 抗血清 を作成し、交叉凝集反応によつていずれの分離株も *L. javanica* と同定した。

L. javanica は、1938年に Essevald と Mochtar によつてシアワで野鼠から分離され、その後インドネシア各地やマレーで分離された。さらに近年沖縄本島でも見出されているが、石垣島でははじめて確認されたもので、*L. javanica* はこれらの地方にはかなり浸淫していることを推測させる。

なお、恙虫病リケツチアに対しては、いずれの系統も陰性であつた。

鼠の捕獲にあつては、伊原間地区の公衆衛生看護婦の大城勝子さんや同地の部落会長松竹巖氏らの御協力をえたことを深く感謝申し上げます。

(小林謙, 上木良輔)

3. 伊原間部落の健康、栄養調査

M3 石原 昌 清 公衆衛生看護学校
" 川野 信之 清水 由美子
" 木戸 靖彦 野口 和枝
" 野田 芳隆 平野 俊子
" 福重 淳一郎 吉田 美枝子

私達は今回の診療と共に、ある一部落を選

んで、そこを医学的に集中的に調査し、沖縄の健康状態を知り、その問題点を探ろうと考え、診療団のベースキャンプである伊原間部落をその対象として調査を行なつた。

伊原間部落を選んだ理由

1. 私達の宿泊地であるので近くて便利。
2. 人口がでごろで全員を調査できること。
3. 経済的、社会的、文化的に沖縄の平均的部落と考えられること。
4. 部落の人達が非常に協力的であつたこと。
5. 現地の公衆衛生看護婦が手伝つてくれたこと。

(調査方法)

診療の第1日目を伊原間部落のみの診療に限定し受診した人について、身長、体重、血圧、赤血球数、血色素値、血清蛋白定量、便の虫卵検査、尿糖、尿蛋白を検査し、一般診療を行つた。また現地婦人会、公衆衛生看護婦の協力を得て、栄養バランス調査も行つた。

(伊原間部落の概況)

この部落を中心とする石垣島の北部(裏石垣)は1955年から宮古島、西表島、沖縄本島などから入植してできた開拓部落である。この伊原間部落は石垣市(人口; 41,265名)の北部約40 km にあり、人口は46世帯290名(1967年)であり、年平均気温23.6℃、年間雨量2195 mm の亜熱帯気候であり、産業は農業を主とし、パイナップル、砂糖きびが大きな現金収入となつている。部落の人口は3年前に比べ19%減少している。部落には中学校が1つ、公民館が1つ、郵便局が1つ、それに保健所の駐在所が1つあり公衆衛生看護婦が1人で住み、住民の衛生管理をしている。娯楽施設はない。電気は24時間供給され、水は簡易水道で

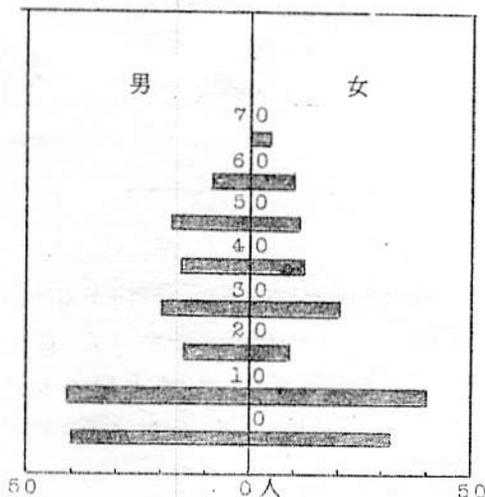
山から水をパイプで引いただけのもので、燃料には石油コンロをもつばら使っている。

石垣島の西海岸と東海岸がこの部落の所で巾が200mほどにせばまりハイビスカスが咲き、珊瑚礁の海に熱帯魚の泳ぐ美しい所である。

次に伊原間部落の人口構成を示しておく。特徴的な事はまず、若年者ことに20台が少くない事である。若年者の多くが、現金収入の少ない、あるいは適当な働き場所のない伊原間をあとにして、八重山、宮古の両群島の他の島々にみられるように、石垣市街へ又沖縄本島へと仕事を求めて出かけていくためであらうと思われる。

次に乳幼児については、最近になってようやく減少のきざしをみせている事は、保健所等の指導などにもよるものと思われるが好ましい事であらう。

人口構成



〔調査結果〕

伊原間部落人口(167.7.25)

男	156	
女	134	計 290
受診者数		うち所見なし
男	69	38
女	61	28
計	130	66

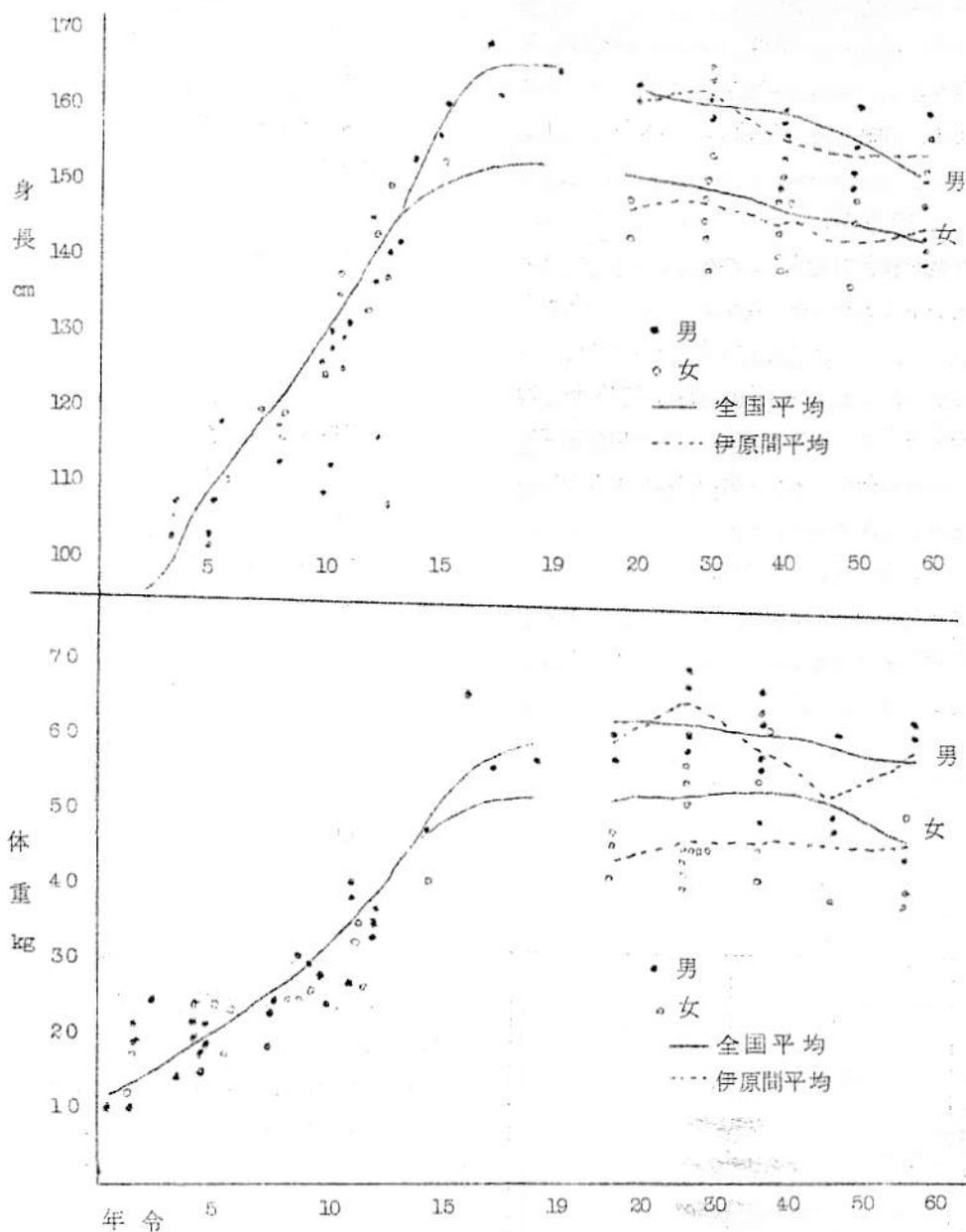
年齢別受診者数

	男	女
0 ~ 9	24	16
10 ~ 19	20	8
20 ~ 29	2	4
30 ~ 39	5	12
40 ~ 49	7	10
50 ~ 59	6	5
60 ~ 69	4	6
計	68	61

この表の如く、現在パイナップルの収穫期とも重なり、部落民の約半数が受診したのみであつた。

所見なしの割合からみると、どうやら女の方が病気もちが多いようである。

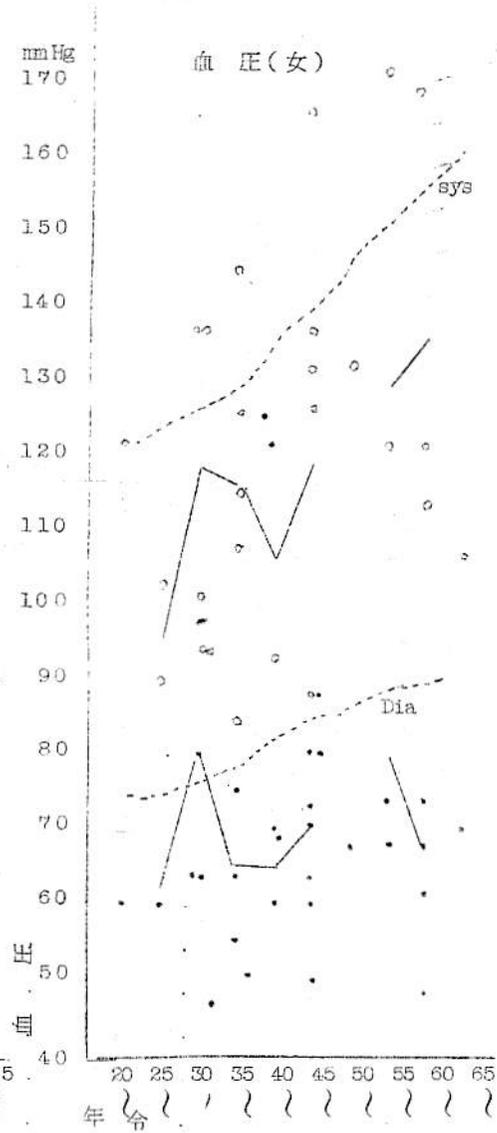
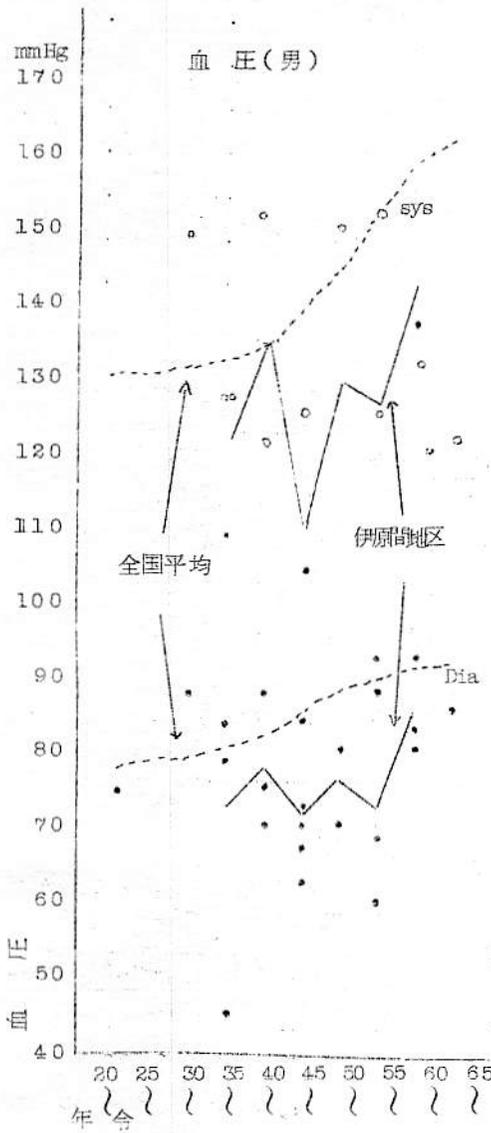
○身長と体重



全体的にみて、日本の全国平均より下になっている。特に体重に於てはつきりとでていると思う。

全体に血圧は低めであり、低血圧が高い頻度に見られ、それは女子に著明である。血圧のみでみると低血圧は高血圧を上まわっている。これはやはり、気候、季節、栄養などの要素が重なって現れたものであろう。

○ 血 圧



血色素は Sahli 比色計で測定した。血色素平均値ではそう低い値はでていないが、この中には40~45%の人も数名あつて、中年の女性はほとんど、貧血気味に見えた。色素係数をとるとすべて「1」を下まわり、低色素性を示している。

全体的印象からして、血清蛋白が低値にあ

るのではないかとこの予想は裏切られ、血清蛋白値はすべて正常範囲にあつた。

○ 便の虫卵検査(三点法による)

蛭虫	9/29	31.1%
蛔虫	2/40	5.0%
鉤虫	4/40	10.0%

第1表 血 圧 (例数)

	高 血 圧 (>150 and >90)	低 血 圧 (<110)	正 常
0~9(0)	—	—	—
10~19(1)	0	1	0
20~29(4)	0	2	2
30~39(12)	1	5	6
40~49(17)	2	7	8
50~59(9)	2	2	5
60~69(8)	2	1	5

第3表 色 素 係 数

年 令	男	女
0 — 9	0.80	0.81
10 — 19	0.78	0.79
20 — 29	0.85	0.78
30 — 39	0.82	0.81
40 — 49	0.96	0.92
50 — 59	0.82	0.85
60 — 69	0.77	0.86

第2表 血色素と赤血球数 (例数)

年 令	男		女	
	血色素 %	赤血球 万	血色素 %	赤血球 万
0 ~ 9	(17) 70	(17) 436	(12) 71	(12) 437
10 ~ 19	(15) 73	(16) 472	(6) 73	(6) 463
20 ~ 29	(1) 85	(1) 499	(4) 66	(4) 422
30 ~ 39	(5) 79	(5) 481	(11) 68	(10) 442
40 ~ 49	(4) 87	(4) 459	(10) 67	(10) 383
50 ~ 59	(4) 82	(5) 492	(4) 73	(4) 436
60 ~ 69	(4) 77	(4) 498	(5) 70	(4) 409

第4表 血清蛋白 (例数)

年 令	男	女
0 — 9	(11) 7.3	(7) 7.5
10 — 19	(15) 7.5	(5) 7.4
20 — 29	(1) 8.6	(1) 7.9
30 — 39	(4) 7.6	(7) 7.7
40 — 49	(3) 7.7	(8) 7.8
50 — 59	(4) 7.4	(5) 7.7
60 — 69	(4) 7.6	(5) 6.4

鉤虫はもつと高値になるべきで、やはり集卵法をやらねばならなかつたと思う。

○ 尿

尿蛋白陽性者 4人 尿糖陽性者 3人
尿糖疑陽性者 3人

○ 診 断

主な疾患 受診者 130人

病 名	人数	病 名	人数
し ら み	10	動脈硬化症	4
貧 血	7	口 角 炎	3
肝 腫	7	慢 性 胃 炎	3
汗 疹	6	膿 痂 疹	3
湿 疹	6	高 血 圧 症	2
五 十 肩	6	低 血 圧 症	2

皮膚科、小児科、内科の診断を合計し、多い順に主なものをならべてみた。この診断を見れば、現地の医療事情がどんなものか、すぐに見当がつく事と思う。皮膚病、貧血、農夫症、栄養不良と並べれば外観は明かるい南

の島に、住んでいる人は悲しい現状にあった。

〔栄養バランス調査〕

○方法

アンケート方式、記名・無記名自由

7月24日～26日の3日間

○内容

6つの基礎食品を毎食組合せて取る事を目標とし、そのバランスを見るため"食事診断表"を利用した。

○結果

46世帯に配布、36世帯回収

回収率78.3%

伊原間部落全体の診断

平均50.6点	世帯数
90点以上；いつもここにこ	3
75～89；まあ安心	4
50～74；少し工夫のいるもの	9
30～49；早く何とかしたい	10
29点以下；困った	10

基礎食品に沿って、欠けているグループの頻度。

群	1日目	2日目	3日目	計	欠けている順
1	0	0	1	1	6
2	4	8	7	19	3
3	0	0	2	2	5
4	11	12	15	38	1
5	7	4	8	19	4
6	8	6	10	24	2

欠けている順に説明すると

4群；乳類、小魚、海藻、きのこ類

6群；5群以外の野菜、果物

2群；油脂類

5群；有色（緑、黄色）の野菜

3群；肉魚介類、卵、豆製品

1群；穀類、いも、砂糖

上記の如く、栄養はかなり偏つていていると思う。ミルク、乳製品が少なく、果物等生野菜も少ない。それでいて、現地の人はそれが栄養学的に良くないということさえ知らない様だ。

食事診断の結果をまとめるに当つて、反省させられた点として

○本人に記入させるアンケート式でやつたために記入内容の信ぴょう性が低い。

○一世帯に一枚診断票を配布した為に家族の中でどういう人がどれを食べたかが不明な点
○世帯の教育程度、収入、主婦の年齢が不明な点

○子供の体格、疾病の状態、有病率の点

以上のような、Host factor の不足、その他に Sample の不足、調査日数の不足などがあげられる。

Sample の不足は限られた地区でしかも世帯を単位とした為であり、日数の不足は短い期間内に調査し、ある程度の結果まで出さなければならず余裕がなかつた為と言えるが、Host factor の不足について最も反省すべき点は調査者の意志が途中で変わったと言う事、即ち、初め記名のもとに記入してもらう予定であつたのを住民の反対に会つて、記名・無記名自由にさせた事である。この事が Host factor を不足させた最大の原因であると言えよう。この為に各戸に合つた事後の栄養指導もできなくなつてしまつた。

またこの他に、全体を通して、事前の慎重な計画が足りなかつた事、比較対象となる調査をしなかつた事などが反省させられる。

〔まとめ〕

私達が診療調査をしたのが真夏の暑いさかりで、しかもバナツブルの収穫期と重なったことが診療結果にかなり影響していると思う。

まとめると、皆小柄でやせていて、血圧はおおよそ低め、女子に著明に低い。そして、時々30~40%の強度貧血を見る。寄生虫も日本内地に比べるとかなりの高値を示して、更に診断を見ると、意外な診断が高頻度にあるのにおどろく。栄養調査結果では栄養的偏りがあるとでている。全体的印象からも、大人たちは何となく活気がない。そして、子供たちが、年齢に比して非常に小さいのに驚いたのだつた。

〔考察〕

このようにこの調査の結果が、私達が最初に予想していた如く、沖縄のある部落の状態が医学的に低い状態にあることがわかつた。私達が住民にこのようにじかに接する迄、ただ外から干渉はできたが、実際その生活に近づいてみると、いろいろと複雑な問題があるようだ。なぜこのような状態であるかと考えると、それはやはり経済的理由によるものが大部分であろうが、その次には健康、衛生に対する知識の少なさもあると思う。栄養調査の結果の説明会の席上、バランスのとれた食事をせねばならぬことを初めて知つたという主婦も多数いたのである。私達も、映画をしてきたが、多くの人達が見に来てくれ、少しでも衛生知識の向上に役に立つたかと思う。

総合的な改善はやはり国家的な見地で政治的なことがかかわってくるが、当面何をしたらよいか。住民がもつと自分の健康に関心を持ち、勉強することだろう。そして、現地に常駐の医師がやはり必要なのだ。私達も、衛

生知識の普及や、一時的な診療はできるが、本当の治療や、住民の健康管理はできない。石垣島にはもうすぐテレビもはいり、一段と文化の波が押寄せてくることだろう。こうしてみると、今後これらの問題を深く追求していくことが、必要だと思うが、今回は初めての診療、総合調査だつたので、現状をそのまま伝えるにとどまつた。更に回を重ねるに従つて、より突つこんだ調査研究をやりたいと思つている。

診療団に参加して (感想文特集)

沖縄学術調査診療を行なつて

今回、私どもが診療を行なつた石垣島の中部以北は、かつてはマラリアが猖獗を極め、度重なる入殖もマラリアのために部落全滅、引揚げ、移住などと悲惨な歴史を繰り返してきた。戦後米国の管理下におかれてから、ようやくマラリアの撲滅対策が成功し、約10年前から附近の島々から入殖し、岡や山を切り開き、パインと砂糖菜とを主とした農業を営むようになったもので、部落により、各家庭によつて生活の軌道への乗せ方はまたまちまちのようである。琉球政府当局では、マラリアに引続いて、フィラリアの撲滅対策に力を入れ、また結核の検診も広く行きわたつている。しかし、亜熱帯に属するこの地方では、その気象条件に加えて、島という宿命的な環境のために、生活条件も必然的に大きな制約を受けざるをえない。例えば、大部分の人が農業に従事しながら、その栽培するものは

比較的価格の安定したパインと砂糖黍に限られ、日常の野菜にはむしろ不自由するくらいで、その種類も少なく、ある種の野菜の時期になると、その野菜だけが毎日続くようなことになる場合があるという。石垣市当局の人の話によると、野菜は作れば随分出来るそうで、南瓜なども一本の蔓に20箇位もなることがあるという。野菜に関する根本的な問題は、消費地域が限られているため、出来高次第で、価格が全然定まらないことによる。また魚についてもほぼ同様で、周囲を珊瑚礁に囲まれた澄みきつた海には、美しい熱帯魚が群をなして、われわれの心を奪うに十分な程見事なものである。現地の人は、普通海にもぐり、銚子で魚をとるが、2〜3時間で30 cm 位もある赤や青の美しい魚を10匹位もとってくる。受診した高血圧性心臓病の老人が「魚をつきに行つてもよいか」と尋ねた。「どの位もぐるか」とたずねると、「3尋から時には5尋ももぐることもある」という。「もぐつたまま心臓麻痺でも起すと大変だからよせ」というと、「釣ならよいか」とたずねたので、「釣ならよかろう」といつたが、さらに、「魚を買つて食べるのは馬鹿らしい」といつた言葉はこの地域の一般的な考え方であろうと思う。従つて、野菜にしても、魚にしても、根本的には自給自足という形をとつていることになり、忙しくて体力の消耗の激しい時に、食事はかえつて単純化されるということになる。

さらに、農耕用の水牛や馬はいるが、普通の牛はほとんど見かけず、牛乳も勿論ないが、牛肉なども普通にはないようである。

しかしながら、石垣島は、わが国内地の離島や沖縄の他の島々と状況が少し異なり、パ

インと砂糖黍を中心として、将来性もあり、人口は増加の傾向を示し、パイン工場には台湾からも多数の労働者がきている。入殖者の人達も、近い将来、生産が軌道に乗り、生活がさらに安定してくると思うが、現在は丁度曲り角にあるような感じで、きびしい暑さの中での労働と、食生活の偏りにもとづいて種々の症状が現われているものが多い。

すでに諸種の統計にも表われているように、この地方の小児の発育は日本内地のそれに較べて少しおくれている。しかし子供は元気で、やがて青年期に達した者は、若さに溢れ元氣癡刺としている。ところが、成人では、結婚すると、殊に女性の場合には数年を経ずして老けはじめ、40才のものが50才位に、50才のものがすでに老人のように見えたりして、加速度的に老化現象が進んでいるように見える。農作業と家庭内の仕事とで多忙を極め、また、結婚後4〜5年で妊娠回数が3〜4回、中年になると8回とか10回あるいはそれ以上におよぶ人が少なからずあることも一つの要因であろうと思う。

人の寿命の8割は遺伝によつて規定される、と山岡先生はいわれたことがあり、緒方知三郎博士も同様なことをいつておられるのを読んだことがあり、私も日本内地で普通の生活をしている人ではそうだろうと思つている。しかし石垣島における今回診療した地区での印象は、きびしい環境に耐えぬく素因の影響は勿論大きいですが、それにも増して環境のきびしさは、これらの人の生命に更に大きな影響をおよぼしているように思われる。

今回の診療を通じて、現地の多数の人達からは喜ばれ、感謝され、小さいながらも社会

のために貢献出来たことは、非常な成功であったと思う。学生諸君は直接診療上からも勉強になったようで、診療開始3日目頃から、病歴の取り方や、血液像その他の臨床検査も見違えるように上手になった。しかし、団員の多くの人が"きつかつた"というように、みつちりきたえられ、私自身も、毎日毎日が知識とエネルギーの持ち出しで、暑さと忙しさのため、命がすりへるような感じをひしひしと感じないわけには行かなかつた。しかし、医学の道へ入つて20年余り、大学に籍をおく者として、そこで習得したものを、こうしたことで社会にそれを還元することはまた意義のあることであろうと思ひ、他方、人の生命に遺伝と環境とがどのように組み合わさつて行くのか、具体的には極めて複雑な問題であるが、いろいろと考えさせられる貴重な機会であつたと思ふ。(小林護 記)

伊原間にテレビが！

やつと、沖縄石垣島の診療も終つた。この診療団を出す迄、いろいろの苦勞もあつたが現地で、予想以上の成果をあげ、喜んでもらったのですつかり準備の苦しさなど忘れてしまつていた。やれやれと思つて博多に帰つてくると、あとのカルテ、データの整理に追われ、一段落したら、東京で全国学生熱帯医学研究会連合の総会に出席、他校のめざましい活躍を見てきた。そして、そのあと、報告会をすませたら、今度は来年の計画が待ち構えていたのだつた。

私達の熱研は、単に学生が集つて南方に行つて研究調査するだけの会でなく、診療をもするようになった。この診療をすることには

いろいろの意見があつたが、今回、石垣に行つてみて、僕はとてもよかつたと思ふ。今迄はわからなかつた島の人々が、準備、診療、あとの歓迎会等を通じて、ひしひしと感じられたからである。改めて、自分は医学の道を選んだことを良かつたと感じたが、その責任の重さ、人々からの期待とを強く感じもしたのだつた。あれだけ文明から遠ざかり、あのような生活をしていることなど、都會育ちの僕には考えにくいことだつたし、僕にあそこに住めと言われても、とても無理だと感じるのが本音である。伊原間部落にテレビがつき、こどもはしらみがなくなり、きれいな肌で、中年の婦人もはつらつとバレーボールでもしている様子を想像してみると、何だか楽しくなるが、そう遠くないことを心から祈つている。

来年もまた、沖縄のどこかに行き、新しい世界に入つて、人の心に接したいと思つている。我々熱研が、その主旨に沿つて、南の厳しい自然と戦つている人々に、その健康の面で援助できることを、僕はうれしく思つている。(M3 川野信之)

石垣島感想

随分暑い所であつた。景色は良くて、伊原間の電気水道施設など思つたよりも良く出来ていると感じたが、先発隊として本隊より10日近く^{先に}博多駅を立つた身であるし種々気がかりな事が多く、本隊到着の頃は既に本土へ帰りたくて耐まらなかつた。とは云つても全てそれは個人的な事柄であるだけに皆頑張つているのを眼にすれば、いやでも自分の不甲斐無さを恥ぢずには居られなかつた。

診療は熱研としてやれるだけの事はした様に感じる。もつとも専ら予診に関わっていたので診察室や検査室でどうだったかは担当の先生方や看護婦さん同僚の学生諸氏の感にお任せする。

受診に来た人々の数は確か三日目が二百数十人で最高であつたが、この日はいつも比較的早く済んでいた予診の方も午後五時までひっきりなしにやつて来る土地の人々のために加減物を言うのも止めたい程であつた。一般に予診を取つた感じでは、受診者は物怯じすることも少く比較的訴えをはつきり説明して呉れたけれども、疾患に対する常識的な知識がかなりあやふやで甚だしい例には本土では誰もが知つていそうな疾患名さえ知らない人も居て、既往症を訴くたびに廻りくどい説明を繰り返さねばならず、暑さと続々とつめかける人々を確かめては、吐息をついた。栄養状態の劣る事は確かな様で三十才を過ぎた婦人は五十才を越えている感を与え改めてカルテを見て始めてふうむとうならざるを得なかつた。

ハイティーンから二十代の男女の受診者は明らかに少数であり、石垣島の美しい景色も若者を引き止めるには無力で、短期間訪島する者にとつてのみ、意味があるのだと言う風に解釈した。実際に産業そのものが若者を必要としないのか、若者の方で島を諦らめて沖縄本島や更には本土へ出て行ってしまうのかは、診療団の一員として以上の関心を殆んど持つていながつた自分には分らない。沖縄諸島の政治的位置については、石垣島では一人の青い眼の人間にも会わなかつたので考える事は少く、那覇に居た前後の数日間のみ、ここは米国の管轄下にあるのだと時々感じる

程度であつた。

とにかく自然の景色だけは素晴しかつた。特に春は最適な旅行地であるらしい。冗談か本気か、新婚旅行はここにしようかなどと言つた者も居たらしい。

非常に愉快であつたのは石垣島の路肩の危なつかしい石ころの道を守るバスで、これには何度乗つても飽きなかつた。とにかく物凄いの一語につきる。エンジンの音も勇ましくて騒々しく、その揺れ方と言つたら誠にすさまじい。"胃腸返し"の異名は診療団の誰がつけたのか正に適切であつた。もつともそれを、昔の女の髪を結い方と関連づけて何の意味だろうと考えてばかり居た自分は余程鈍い。あのバスだけは一度は乗つてみる価値がある。しかし新婚旅行には不向きかも知れない。

(M3 木戸靖彦)

忙しく学内をあちこち歩きまわっている時
秋のすきとおるような青空をみあげた時
お碗の中の豚肉をはしてつまみあげた時
そんな時ふと南の島を思い出します

調子はずれのテンサグの花の聞える時
貧血ぎみの夜空の星に気付いた時
ガタガタバスに揺られている時

そんな時すぐに浮んできます 南の島が

十六夜の月が水に影うつす時
青い風船大きくふくらましている時
赤い顔を友にニヤニヤみられる時

そんな時なんとなく懐しい南の島です

ラジオの台風情報を聞き流す時
みられない切手の便りを手にした時
貝がら片手でもてあそんでいる時

そんな時なんだか遠い南の島です

もう一度行きたい？ うん、行きたい
きつかった？ うん、でも若いからな
素足で歩いた浜辺、ハブのぞろという草むら、
沼につかつか水牛
バインと踊りと蛇皮線と

そんな南の島へ行つた様な気がします
遠い遠い昔みたいですよ

(M3 福重淳一郎)

秋の野にススキが美しく風にそよぎ、朝夕肌
に寒さを感じる今、南国の太陽が照りつけて
いた伊原間は、まるで夢のようだ。煩しい世
間から全く離れた孤島での十日間今となつて
は本当に幸せな日々だった。昼の伊原間は、
ギラギラとまぶしい緑の青の海、白い波、黄
色やブルーの熱帯魚、甘い香りを風に漂わせ
るパイナップル、真っ赤な花と緑の葉つぼの
ハイビスカス。夜の伊原間は、その日の仕事
もすべて終り蛇皮線のもの悲しい音がどこか
らともなく聞えてくる夜の十時か十一時頃、
海に行く、私達以外誰もいず、ただ波の音だ
けが聞えてくる。砂の上に大の字になり空を
見上げると大小の無数の星、銀河がある。じ
つと見ているとスーツと星が流れる。潮ざい
が聞える。又星が流れる。自分の体が自然の
中に溶けこんでしまいそうな気がする。一日
のうちにこんな素晴らしい時が過ごせたら私
はこんな無医村に一生をささげてもいいのだ
が。。。。。。八日間の診療も無事終え那覇への

船を待つている時、私は伊原間へ来る何か月
も前から思っていた問題が頭に浮かんで、ふ
と悲しい様なわびしい様な気持ちになった。//
私はいつたいここで何をしたのだろう。毎日
朝から晩までハルンコツブ代用のジヤムやケ
チャツブの瓶を指さしては「尿をここまで入
れて来て下さい」そして尿を調べる。そのの
繰り返し、おかげで皆んなから Dr. Harn と
あだ名を頂いた。でも M2 の私にとって出来
ることはこれ位だ。まあこれはいい。だが私
達が去つてしまえば伊原間には又医者がいな
くなって元通りになつてしまう。果してこれ
でいいのだろうか。村の人は大変喜んで送
別会を持つてくれた。私達も一人一人出来る
限りの努力をして全力を尽くした。来て良か
った……これは無医村診療団がよく云うセリ
フだ。これではいけないなんとかしなければ
。//

この問題は今もなお私にとって何の解決もな
されていない。無医村診療の意義について考
え、むしろ疑問視する時、「来年も是非来て
下さい。村の者は大変喜んでます。是非
とも来て下さい。お願いします。」と云つて
私に頭をペコペコ下げたある村長さんを思い
出し、又もやどうしていいのかわからなくな
つてしまう。

伊原間を思う時もう一つ忘れられないもの
がある。それは村の衛生管理をしている大城さ
んに会つたこと。彼女は、医者のない伊原
間の云わば // よろず屋 // さんである。私とた
いして差がない年令なのに、ものすごくしつ
かりしていてフアイトに満ちて仕事をしてい
る。「こんな所において家に帰りたくありませんか。」と云う私の問いに「私は仕事がとつ
ても楽しいんです。一年毎に医者が変わるので

この人はかわいそうです。村の人は非常によくしてくれるので私も一生懸命しています。」彼女独特のアクセントでこう云った。なんの娯楽もない孤島でしかもまだ若いのにたった一人で仕事に励んでいる人、私は驚きと同時に尊敬の念で胸がいつぱいになった。前に伊原間は素晴らしいと云ったが、あれは忙しかつたけれど生活がかかっている十日間の伊原間だったからだろうと思う。直接生活がかかっている彼女の様に云えるだろうか。それは疑わしい。無医村に気をひかれながら種々の欲望を捨てきれそうにない私にとって彼女の存在を知ったことは、本当に大なる収穫であつた様に思う。彼女と色々なことについて話したかつたけれど、多忙のあまりそのチャンスを得られなかつたのは非常に心残りです。

(M2 角田克子)

怠 け 者

銜舌と喧噪の中

虚勢と不信の中

今にもつぶれ、ただきのめされ、うちく
だかれてしまいそうな……

誰からも逃げ

誰かに助けを求め

必死にウロウロと

出口を求めてウロウロと

そして溜息一つ

また朝

ねむたげに眼をあげ

うつろに眼をあげ

欠伸を一つ

虚勢と沈黙の世界へ

精神錯乱

物体一個

(M2 関宗雄)

船中、船の別れは悲しく切ないもの、ロマンティックな一面を持つと自負している彼は、荷物を運び込むなり、一人感傷にひたろうと、甲板に飛出した。やがて、テープを持つ手がくたびれ、お互に何かか気まづくなつた頃、船は岸壁を離れる。テープが風に乱れ舞い、水面を色どる。陸が遠くかすみ、薄暗い帳の中に、燈台の光がキラめく。しかし彼の心には何の感情も湧いて来ず、大いに失望す。

砕けゆく波を見ながら考えた。とうとう来てしまった。内面的挫折が多くあつたが、とうとう来てしまった。もはや熟研という怪物に捕られ、決して逃る事の出来ないあわれな小羊になつてしまつたのを感じる。仕方ない、後は全力をつくすのみだ。波間に漂う藻を見て俺の人生とはこんなものだろうと、ふつと彼は考える。

揺れない、皆のゲンナリした顔が見れると喜んでいたので、大いに失望す。わずかの望みを帰りの船にたくす。そして彼の望みは多少かなえられたのであつた。

飛魚、船の上より初めて飛魚なる魚を見た。尾ビレで水を叩いて、水面すれすれに飛ぶ、もつと高く飛ぶものと思つていたので少し失望す。メダカみたいに小さいのまで飛んでいる。全くなまいきな魚である。

石垣島、暑い、熱い、太陽が頭の真上にある。五分も歩いていたら、道が左右に揺れて来た。思わず頭に手をやる。すっかり熱くなつている。これ以上いかれては大変とポーズを

買い込む。冷房のあるのは、何軒かの喫茶店とパチンコ店のみ、当然より生産的な後者に入る。面白いほど出る。ドルを稼いで意気揚々と引上げる。後日、彼はまた、ノコノコ出かけて行つたのである。そして大いにイカれたのであつた。

ツマベニチョウ、幼少の頃よりの憧の蝶、夢にまで見た心の恋人、真赤なハイビスカスを訪れるツマベニチョウ、感激の対面、苦勞して来た甲斐があつた。しかし次の瞬間、彼の冷酷無慈悲な手は、その上にネットをかぶせたのであつた。そして今、その蝶は、彼の下宿の片すみの、標本箱の中で、美しい姿を保ちながら永遠の眠りについているのである。海岸ではるか遠方にオオゴマダラの優雅なる姿を見つける。この暑い中を走って行くべきか、行かざるべきか、おまけに足は怪我をしてる等と考える暇もあらばこそ、脱兎のごとく駆け出す。途中でツツカケを投げ出し彼は走る……。ネットを振る、左に右に、上に下に、思わずパシツという手ごたえ、あわれ蝶は真二つ、ただ羽のみが南国の太陽を浴びてヒラヒラ舞い下りた。涙と汗に濡れて呆然と立たずむ彼、汗が足もとに流れ落ち、何故か太陽がまぶしかつた。

診療、尿の検査を受けもつ。最少学年の由、長く苦しい下積生活が始まる。最初の患者が来る。コップを渡す。尿をとつて来る。テストテープをつける。一分間時計を覗む。変化なし。尿を試験管にとり、酢酸を二、三滴、試薬を落す。変化なし、陰性である。次の患者が来る。同様の事がくり返される。陰性、次も陰性……。次第に彼の柔和な顔にあせりの色が浮ぶ。やり方はこれでよいか、試薬は、先輩に聞いたり、本をひつくり返したり、不

安、あせり、エトセトラ。何気なく落した一滴に尿が白濁する。心臓がドツキリ、もう一度小さい目を大きくして見る。確かに濁っている。思わずこみ上げてくる笑を咬殺す。顔が醜く歪む。煮沸、消えない。彼は大いに満足しておもむろにカルテに(++)と書込む。これこそ検査者の生甲斐である。

帰りの船中、碎けゆく波を見ながら考えた。何故か、彼はさみしく、悲しかつた。心はうつろで何か満たされないものを感じた。しかしそれが何であるか、彼には解らなかつた。

(M2 瀬々頭)

「これお願いします。」心の中ではもういいかげんにしてくれと思いつつも、はい、お名前は、では異常がありましたら後ほど公看の方からお知らせします。とうらはらな言葉が出る。こんなに苦々しく思っているのは別にこの仕事がいやだからでは少しもないのだ。気温は高いが、湿度は低く快ちよい風が吹き抜ける。この伊原間中学校の教室の角の少しばかり空気のこもつた場所に座わつて、顕微鏡をもう大分見ているのに、少々土地の人には悪いが、意に反して寄生虫卵を見つけることが出来ぬからなのである。それにあの嗅気をかいているといくら穏やかさをもつて自称する私も少々いらいらしてくるし、それに連日の検査で目はちらついてくるのである。石垣島の伊原間に夏期無医村診療に来て数日たつがまつたく一月も毎日朝から晩まで働き回つたような気がする。我々は耳を切つたり腕に突き刺したりするのみでまだまだ先生方に比べれば楽なはずであるし、若いから元気であるべきなのに、かくもくたびれるとは。思いも、当然思いもしなかつた。

それにしても南国の自然は美しい。音楽と絵画が香りと共に漂よう。伊原間の海は暖かい。太陽のひざもとで、あおむけになつて海に浮かぶとサンゴ礁にたたきつける波が遠くからひびく。サンゴの上に立つと小魚は足をつつく。海の中は青黄赤等ネオンサインの林だ。少々海底近くまで潜るとサンゴの小枝の中に小魚は花びらのごとく集りたわむれている。海は澄み、遠くまで見える。緑と青のカンテンを思い出した。サンゴは、もしも赤いサンゴをひろつたら君にあげようとかんとか、残念ながら海岸は白い棒のようなサンゴだけ白い。一行のだれ一人このような白い顔の人はいない。サンゴの砂は美しい白くさらさらして海の香と南海の青色の香が漂よつて、恋が芽生える。色を表現するには私の語いの不足をなげくにすぎない。余りに美しくかくのごとき魚を食べようとは思ひもよらぬ。昔々あんな色の魚を画いたつけない。夜の間あのきれいな色はきつと月の光で染められてるんだ。伊原間には又いろいろな動植物がある。パイン、サトウキビ、バナナ、パパイヤ等々。パインの畑は小高い岡を昇り下りくまなくネズミが走りまわれる程きちんと耕やされている。小さいパイン、大きいパインネズミにかじられたパインがはるか彼方まで香りを漂わす。パインを一杯に積んだトラックは砂煙をおおて走る。砂煙に混じつてパインの香りをいつまでも残す。じやりじやりした香りではない。甘いフルーツの香りだ。パイン1個50、バナナは1本村の中にある。風に吹かれてゆさゆさして、青い幹と同じ色のバナナが一房ゆれている。バナナの香りは漂わず、その向うの茅葺の小屋のみが印象的だ。ガジマロは天をおおう。根つこは土の中にあるのか空

中にあるのか解らない。昔これでブランコを作つたと老人が言つていた。濃い緑の日蔭は快良い風が吹き抜け幹の中にはアマン(やどかり)の親玉が巢食つている。この木の下で伊原間最後の日山羊が一匹断末魔と共に真黒に焼けこげ我々の食卓に供されたのでガジマロは山羊の臭いがする。パパイヤは青いうらなりひようたんだ。緑のひようたんが青い空に浮かんでいる。食べたかつたなあー。ハイビスカスの赤い花は太陽が移り住んでいるのか。庭の垣根の赤いあの大きな花びらは太陽の輝き以上に光っている。ナース達の白い帽子につければさぞ美しかろう。君間違うなよ花がだよ。この花には妻紅蝶が集まる。赤い花に白い大きな花びらがデートにやつてくる。ここには南国の夏の愛の香が漂よう。伊原間ではハイビスカスに妻紅蝶が来るが、沖縄本島の南部戦跡では、太平洋戦争のあの激烈な砲火の下に、命を断つた人々の霊をなぐさめるがごとく、白くやさしく舞っている。断崖の上からはるか太平洋の水平線をながめてその中空に舞う蝶は心に涙を漂よわす。二週間もの短い間だが土地の人々に非常に喜ばれたことはたいしたこともしなかつた私できえ非常に喜ばしい。本土から1500キロも南方でいい経験をしたと思う。それにしても中学校の教室の壁新聞の一面を今もつて脳裏に思い出す。

「日本と月とはどつちが遠いだろう。」「日本の方が遠いさ。月は見えるけど日本は見えないもの。」 (M2 玉田隆一郎)

// 浮かび来るは かの蒼き魚

静かなるその燐光と //

太陽の光がキラリ、キラリと射しこんで来

る海の中を泳いでいるうちに、その海の深い色がすっかり体中に染まつてしまったようなあおい小さな魚を思い浮かべると、石垣島で過した日々が再び心の中に広がり始める。

波もなく、月の輝きも明るい快適な船旅の第一夜を過した次の朝、目の中にとびこんで来た海の色はたとえようもなく美しい。その淡く深い色はまさに南の海である。とびうおが水の上にくつもいくつも輪を描きながら滑走していく様は、いつまで見ても飽きる事がない。あとに残った波紋の美しさに見とれてしまうのである。

見渡す限り、広がっている海の色に加えて空の青さと、白い雲のまぶしさは一層南の海を感じさせ、〃海は広いな、大きいな〃と歌いたくなってくる。そして船に続く伊原間へのでこぼこ道は、ハイビスカスの赤い花と、そばを通ると車の中にまで漂つて来る甘いパインのにおいが南の島を感じさせる。月が上り始めると月の影がいくつも連なり、海の上に黄色い帯ができる。ガタガタと車に揺られながらながめているとその上を月まで歩いて行けそうな気がしてくる。

まわりに見える自然の美しさが余りにも印象深く、石垣島の暑さ、診療期間中の忙しさきつさは片すみに押しやられてしまう。2週間余りの日記にもバスが着く度につめかける患者さんに診療室と処置室や受付の間を行ったり来たり、昼食が3時になる程忙しかった診療の事よりも、回りの海や空や緑の美しさとその中に遊んだ時の楽しさばかりが残っている。2ヶ月過ぎた今、思い返してみるとなんとなく夢の中のできごとでもあつたかのようである。2週間が余りにもあわただしく過ぎてしまったせいか、船の旅を重ねて重い

荷物を運び、診療に加わつて来たこともウソみたいに思えてならない。

計画して行つた事も診療に追われて、実行しないままに帰つて来てしまつたし、1週間の診療期間は日程を無事に終えたものの、毎日遠くから診療を受けに来た島の人達が果して、満足して帰つたかどうか、忙しさにとりまぎれてつい、私達の態度もつつけんどんになつてしまつたのではなかつたかと、今になつて色々反省させられる。医療に恵まれぬ人々が1回きりの診療で放り出されることなく、明るい自然の中で一層健康な毎日が送れるように、このような診療が続けて行なわれることを望みたい。

ともあれ、石垣島の診療に参加した事は私に数多くのものを残してくれたようである。

濃く、深い色をした海、緑と青のそれぞれの濃淡で色の帯を作つた明るい海、伊原間の山の緑と空のコントラストの鮮かさ、〃やせる思い〃をした診療、そしてその合間にのどをうるおしてくれたとりたてのパインの味もみんな忘れられないものばかりである。

(福岡県立公衆衛生看護学校

清水由美子)

沖縄石垣島診療班に参加して

大勢の人に見送られて、博多駅を出発し、鹿児島に到着して帰りつくまでの、あわただしかつた事。

本当に、あれよ、あれよ、という間に過ぎ去つてしまつた沖縄石垣島診療班に参加した20日間であつた。

出発する前に〃風土病とのたたかい〃を読んで、ハブ咬傷の予防のため長くつを持ち、用心棒を持つて、又、風土病としてのフィラ

リア多発地である沖縄なので、写真でよく見られる大きな、亀裂のはいつた足、象皮症やフイラリア診断の為の真夜中採血、検鏡での原虫の検出、等々の期待は見事にはずれ、ハブにはお目にかかる事ができず、検鏡では、便の中に蟻虫を一度のぞかせてもらったきりであった。

農作物についても、どの様なめずらしいものを食しているのか、興味深くてあつたが、市内の市場に行つて驚いた。内地と全く変りばえがない。勿論、とうがん、えんさいと、めずらしい野菜が2〜3種あつたが。

診療の為の会場中学校をかりて、会場造りをしながら、患者は多く来てもらった方が働きがいがある、等とはりきつていたが、イザ本番となると、＼さばけど、さばけど、人波は、はるかかなた＼は、少々オーバーであるが、これといくぶん似かよつた現象が続き、皆グロッキー気味であつた。

この期間中もつとも鮮明に残っているのはやはり南国独特のすばらしい海である。

昼の海、夕暮の海、晩の海、とそれぞれに異つたカラーと各々のカラーにmatchした波のとどろきとをかもし出して、自然の音楽に陶醉させられた。

伊原間滞在中、夜寝る前には、いつも、明日こそは早く起きて海を眺めに貝がらをひろいと期待をかけて休んではいたが、昼間の過労?のせいか唯の一度も、念願が果されず今思つても、誠に無念である。きつと一生思いつづけるであろう。

この様にして眺めるだけの海は、何時間でもあきがこないが、この海の上を走る船!となると、いかんともしようがない。

"行きは良い良い帰りは何とやら"で石垣

島から那覇港間の航海には、全く痛めつけられた。ひどいロール・ピッチングで青い顔をして枕にしがみつ、生きた心地のしない数時間であつた。陸に上つてからも、ゆらりゆらりと揺れている様で、気持の悪い事といつたらなかつた。

以上の様な事ばかり書いて来たので、何をしに行つたのかと疑問を起させそうであるが数多くの貴重な体験があつたと思う。

この期間を通じて、チームワークの重要性について痛感させられた。何事をやるにも、唯個人のみ力では何もできない。特にこの診療団の目的の一つであつた衛生教育という事においては、尙更である。健康を保持増進させるには、専門家だけでなくあらゆる人々の一致協力が必要であろう。

この様な貴重な体験を今後の生活・学校等に生かし、健康な社会人になれる様努力していきたいと思う。

(福岡県立公衆衛生看護学校

野口和枝)

沖縄診療団に参加して

真夏の太陽しかも南国の日差しは強くまぶしかつた。今日祖国復帰で盛んに問題になっている沖縄に、夏休みをかけて、またとは出来そうにもない大変にいい勉強をして来た。九州大学医学部熱帯医学研究会沖縄診療団に我県立公衆衛生看護学校からナース兼保健婦学生として我々4名は参加した。医学生諸氏は私達を大変快く迎えて入れてくれ、先ず打ち合わせから始まり、毎週の部会にも欠かさず出席させてもらった。私達も学校、級友等の期待にこたえるよう頑張らねばならぬと決心。しかし思っていた様に総て事がスムーズに運んだわけではない。衛生教育の計画も実際に於いては、患者が多く診療に追われた事、その他いろいろ多方面からの障害もあり計画通りにはいかなかったが、各疾患に対する食餌指導、生活指導等のパンフレット作成、映写会のためのフィルム、スライド集め等に奮闘した甲斐は少なからずあつた事と思う。総務を始め医学生諸氏は実に親切で私達の仕事にも大変協力をして下さつた。振り返つてみると現地での診療のためのこの様な準備期間は長くしかも大変めまぐるしく忙しい毎日だつたように思う。診療期間も又、目の回るような忙しさで住民には喜ばれながらも8日間と言う日々は夢中のうちに過ぎて行つた。

診療の疲れ出て昼寝かな

島から遠く彼方にはサンゴ礁に白い波が砕け散っているかの如く見え、あのエメラルド色の海は実に素晴らしい眺めであつた。仏そう華の花は、あのまばゆいばかりの太陽に負けじと真紅の花弁をつけ競い立ち、自然手を伸ばしたくなるような垣根が続いていた。

思い出のハイビスカスの日除かな

また夜の海は静かだつた。砂浜に寝転んで仰ぐ星空、星のまたまきは見事なもので星屑とでも言うか、何とも形容し難い夜空の美しさ。そして取立てのバイナツブルは車で工場に運ばれて行く。その車と行交う毎に香りだけが残されていく。今ではバイナツブルの鼻につくのを感じた頃が懐しく、あの新鮮な香りが心残りである。自然が一杯の思い出の南国に今一度是非行きたいものである。ここに、思いのままに繰つた俳句を書いてみた。

那覇港に出迎え多き日傘かな
夏帽の下に髪なく石垣を
石垣の島を真近にリュック背り
級友の出迎え仰ぐ日焼かな

(県立公衆衛生看護学校

吉田美枝子)

伊原間だより

沖縄診療団の皆様

伊原間診療から、早一ヶ月も経ちました。団長先生おはじめ、皆様方にはすっかり診療疲れはとれましたでしょうか。猛暑の中で、息つくひまもなく忙殺された八日間の無料診療、ほんとうにお疲れ様でした。皆様方には、慣れない土地と気候、その他の闘いで大変な毎日だつたことでしょう。不備な受入体制と、又、浅い経験による私の不十分な準備の中で、住民の満足に価する親切丁寧な診療をしていただいたことを深く感謝申し上げます。ほんとうにありがとうございました。

今、伊原間は、尚続く猛暑のあいまに、台

風20号、21号と、台風シーズンを迎えながらも、パイン収穫の最盛期と植付に急がしい毎日を送っています。

無医地区の不安、不便さを日頃からいやというほど味わっている住民にとって、今回の診療は意義深かったと思います。

診療以来、保健所集団事業のかたわら診療事後処理のための家庭訪問にかけづり回っている私に「自分の健康度をはつきりわかり安心して働いている」とか「元気なつもりが、やはり病気をもっていると言われ、今はその治療にはげんでいる」とか「言われた通り精密検査を受けて、どうもないと言われ、ほつとした」とか、喜びをかくせないばかりに「当日、いただいたお薬が効果があつて今はすっかり気分がいい」とか「心配した皮膚病が、いただいた軟膏でかゆみがとまり、すっかり消えた」などの診療に対する感謝の気持を住民から聞かされる時、再び猛暑の中で闘った皆様に感謝せずにはいられないこのごろです。

同時に、「もう少しの期間、経過観察をすれば、どんなによかつただろう」「もつともつといろいろな御相談が必要ではなかつたか」と思える方々とお話していると、短い期間の無料検診の問題点とは別に、無医地区の宿命というようなことを、ことさらに考えさせられたり致します。

日頃から、予防医学と治療医学がしっかりと手を結んだ上で進められる公衆衛生事業は合理的で、又、住民への最良のサービスであることを痛感している私にとってせわしかつた診療の八日間はほんとうに心強く、安心した毎日でございました。

九月を目の前に診療会場として使用された中

学校は再び、にぎやかになろうとしています。しかし、皆様方のあの宿泊所に再び灯のつくのはいつのことか……

けれども1970年度を目標に沖縄で唯一の政府立大学に新たに医学部設置の問題が具体的な計画として進められている現在、きつと近い将来、伊原間にも医師の確保ができ、宿泊所だつた医師官舎にも灯が輝くと同時に、私たち住民が安心して働ける日のくることを信じています。その日のことを思うと楽しくなります。

今回の診療では、海を遠く離れた所からの献身的な御計画、ほんとうにありがたうございました。

尚、これを機会に、今後とも、親睦を深めると同時に御指導をよろしくお願い申し上げます。

最後に、団長先生おはじめ、診療団員の皆様方の限りない御多幸をお祈り致しまして、遅ればせながら御礼の手紙に変えさせていただきます。

乱筆、乱文でごめん下さいませ。

1967年8月31日

石垣市伊原間駐在公看

大城 勝子

沖縄診療調査団御一同様

九大医学部熱帯医学研究会沖繩学術調査診療団会計報告

(収入の部)

個人負担金	152,000
西日本新聞民生事業団	150,000
寄附金(団体)	150,000
賛助会費(各製薬会社)	104,000
計	556,000

(支出の部)

交通費	258,796
(内訳) 博多・鹿児島間往復	54,500
船 船 代	169,986
バス・トラック代	34,310
連絡通信費	5,375
食 費	133,040
宿 賃	23,976
準備費(文具、薬品、パスポート)	13,813
熱医連総会派遣費(於東京)	19,500
九州ブロックゼミ派遣費	6,500
報告書作成準備費	45,000
来年度予備調査団準備費	50,000
計	556,000

協賛。官公庁。団体。会社名

琉球民政府	石垣市	琉球海運
琉球政府厚生局	八重山保健所	九大同窓会沖縄支部(九大会)
沖縄医師会	八重山病院	琉球新報社
八重山医師会	伊原間部落	西日本新聞民生事業団
八重山地方庁	博多港運	

福岡四地区ロータリークラブ	九州電力	富士フィルム
〃ライオンズクラブ	福岡県・市医師会	小西六写真
西日本鉄道	竹中工務店	日清食品
西部ガス	間組	泰明堂
福岡銀行	藤田組	

アメリカンエーリング	大日本製薬	万有製薬
エーザイ	大鵬薬品	久光製薬
大塚製薬	武田薬品	福田エレクトロ
小野薬品	田辺製薬	藤沢薬品
科研薬化工業	中外製薬	明治製菓薬品部
協和醸酵	東亜栄養工業	明治乳業
興和新薬	鳥居薬品	森下仁丹
三共	日本化学	森下製薬
塩野義	日本新薬	山之内製薬
第一製薬	日本ヘキスト	
台糖フアイザー	パークデービス	

あ　と　が　き

昨年の熱帯医学研究会八重山群島調査団の報告に基づき、我々が診療団派遣を計画して約一年。時には計画の変更も余儀なくされ、遅れがちの郵便に悩まされながらも多くの学内・外関係者各位の御協力、御援助を賜つて、7月やつと診療団派遣にまでこぎつけました。

小林団長のもと、医師4名、研修生2名、学生12名、公看学生4名の一行22名は種々の困難にもめげず無事にその務めを果して8月帰福しました。診療に際しては、数多くの現地の方々、特に我々と労を伴にして頂いた公看の大城さんをはじめ部落会長さん、婦人会長さん、青年会長さん、我々の食事を作つていただいた松堂さん、武松さん、名前をあげれば数限りない方々の御協力があつたればこそと深く感謝しております。短期間の事で十分な診療もできない状態ではありますが、今後も少しでも沖縄の人々のお役に立てればと思つています。

遅くなりましたがようやく報告書ができあがりました。沖縄の医療状態について少しでも参考になれば幸いです。
(1967. 12. 20)